

〔演題〕

**歴史知の知平
あるいは【転倒の社会哲学】
——研究生活 50 年によせて——**

〔講師〕

石塚正英

【講演関連情報】

☆講演機関：歴史知研究会 第 64 回例会

☆講演会場：立正大学 品川キャンパス

☆講演日時：2019 年 12 月 1 日 14:00～18:00

☆録音データの文章化にあたり参考資料の注記や内容の補足を行っている。

あいさつ

- I. 学問する社会運動家
- II. 学問する社会思想家
- III. 学問するマガジンエディター
- IV. 学問するフィールドワーカー
- V. 恩師

あいさつ

みなさま、本日は日曜の休日であるにもかかわらず、私の記念講座にお越し下さいまして、まことにありがとうございます。

さて、その昔、織田信長でしたか、人生 50 年とか人間 50 年とかいっていました。あの人は本能寺の変で明智光秀に攻められて自害したのではありますが、それでも、昔は 50 歳にもなると大体よぼよぼのじいさん、ばあさんになっていたのですね。でも、私は研究を始めて 50 年なので、生きている年限はそれ以前に 20 年あるから、いま 70 歳です。

視力は白内障が進んでうまくないので手術しましたが、今はいたって健康で教育と研究

に勤しんでいます。退職を記念して何かをする気は全然ないです。退職と引退は別のことですから。そうではなく、研究生活 50 年という意味でなら、おおいに意義を感じます。還暦を祝うとか古稀を祝うとか、そういう意義もあるけれども、きょうの講義は、研究生活を 50 年全うしてきた節目を画するのだと私自身は位置付けております。そこはどうぞご了解戴きたく思います。

それでは、これから 4 部に分けてお話ししたいと思います。スクリーンをご覧ください。資料トップページに「Ⅰ. 学問する社会運動家」「Ⅱ. 学問する社会思想家」「Ⅲ. 学問するマガジンエディター」「Ⅳ. 学問するフィールドワーカー」とあります。ⅠとⅡを最初の 1 時間ぐらいでお話しして、10 分ほど休憩をいただき、その後、Ⅲ、Ⅳと進んでいこうと思います。

私はいま 70 歳ですが、いつも、人の運命は時代に翻弄される、あるいは人は時代を肥やしにして生きる、どちらもあり得ると思います。たまたま私が高校を卒業し大学に入学した頃、1968 年、1969 年の頃は、当時の意識ある学生たちからすると大学は最も躍動的なときでした。しかし、大学を管理する側の人たちから見ると、最も危機的なときでした。

具体的な例を出しましょう。今の香港です。犯罪容疑者の中国本土への引き渡しを認める「逃亡犯条例」への抗議に端を発する学生中心のヴァイオレンスです。今年の香港で起きているのと似たような事態は、1968 年 10 月 21 日に新宿の東口広場で生じていましたね。国際反戦デーのこの日、新宿駅周辺をデモ行進し機動隊と衝突する新左翼各派の学生たちの行動を指して、マスコミは新宿騒乱事件とか書いていました。広場から歌舞伎町に行く辺りの道路では火炎瓶が飛び交っていました。必ずしもそういう暴力的なことだけではなく、価値や基準が、いろいろな領域で大きくうねっていました。

1940 年代末の第一次ベビーブームに生を受けた私たちの頃は大学生の数が桁違いだったこともあるので、マンパワー、文字どおりそういう言葉が当てはまるような時代でした。別段、学生運動とか政治的な闘争というだけではなく、いろいろなところにそういう力が突出していました。その頃に大学生だったことが、ひとつの運命的なものではないかと思うのです。自分が時代の何かを選ぶのではなく、時代がしゃにむに自分に迫ってくる。今の大学生に向かって、昔の俺はこのようにしたのに、今のお前らは何でやらないの、へなへなしているんじゃないよ、という説教は、時代が違うから一概に妥当しません。

1990 年代になってからですが、私はよく自分の講座の学生に、「君にとっての現代史はいつから始まったの？」と聞くようにしてきました。私にとってはいま言ったように大学

に入る前後、68～69年の頃が現代史の開始です。以後、そこを基点にしていろいろなことを企図したり決断したりしました。

しかし、今ここにいるみなさん方は、例えば30歳代の方にはそんな時期を基点にして決断はできないわけです。3.11が基点の人もいることでしょう。だから、自分の基点と石塚のように68～69年ごろに大学生になった者の基点の比較など、してもらわなくていいのではないかと。自分にとっての現代史はいつ始まったか、そのヒントのように思ってもらえると、私はこれから説明しやすいです。

I. 学問する社会運動家

(1) 二〇歳の自己革命

「I. 学問する社会運動家」に入ります。私は1968年、長野市で浪人していました。大学受験に失敗して、どちらかというところ理系の自然科学、地学とか生物学とか、そういう分野で研究したいと思っていたのですが、68年に長野の予備校の寮に入ったら、東京から聞こえてくるわけです。

ヨンニッパー、4月28日は沖縄デーとか、ロクテンイチゴ、1960年6月15日は安保闘争の渦中で樺美智子さんが虐殺された日だとか、ジッテンニイイチ、10月21日は国際反戦デーで、全国的にというか大都市が中心だと思うけれども、抗議デモがあるとか、聞こえてくる。いろいろな大学でいろいろな問題が起き、いろいろな事件が起きているのが、長野にいても聞こえてくる。

私は理系の勉強をし始めたのだけれども、そういうニュースを聞きながら社会に関心を強めていきました。「ちょっと皆さん、これからラジオを聞いてください。生の放送です」と予備校の講師がいて、ソ連軍を中心としたワルシャワ条約軍がチェコに入っていくというチェコ事件を、予備校の授業を中断しながら聞いているのだからね。その先生も聞きたかったのでしょう。信州大の教員で予備校では英語の先生でした。英語の音を出すために持ってきたテープレコーダーがラジカセだったのかな。とにかくラジオも聞こえるわけ。「ちょっと英語の授業は中断。今からものすごい臨時ニュースを聞いてもらうから」といって、戦車がチェコに入っていくところですよ。そういうものを聞いていますから、運命的な面があるのですよね。

その間に私は歴史学とか哲学をやりたくなりました。それで1969年、二〇歳になる年

に大学の入学試験を受けたのだけれども、受験勉強は全然していません。三里塚に関する映画を見に行ったり、当時は森山良子がデビューしており、フォークソングのライブを長野市の城山公園という市民憩いの場でやったり、そういうのを聞きにいったりしました。

受験勉強しなければいけないというので本屋に行くのだけれども、行くとアルベール・カミュとかジャン・ポール・サルトルとか、そういうのばかり買って読むわけです。今ある自分は何なのか。自分を崖っぷちにアングジェ、投企しなければいけない。サルトルの実存主義ってすごいなとか思いました。カミュの『シーシュポスの神話』とかを読むと、ものすごくむなしいことを強制されるのに会うよね。シーシュポスは神様に命じられて岩を山の上に持っていくのですが、持っていくと、また落とされしまうわけです。またそれを持っていく。永遠にこういうことをやる。不条理のカミュはそれが人間を鍛える運命と言いたいのですが、それはアウシュビッツと似ているなど私は思いました。

アウシュビッツという個別の収容所とは限定できないのですが、ナチスがユダヤ人やスラブ系の人たちを収容所に入れると、官吏たちは、午前中は「ここにある土砂をみんなこっちに運べ」と言います。それで一生懸命、土砂を運ぶ。そしてお昼になる。「さあ、みんな。午前中にここに運んだものを、午後はまた元に戻せ」とやるわけです。そのようにして人間を精神的に破壊していく。全く意味のないことだよ。お前たちは全く意味のない人間なんだよ。だから浪人生活にあって私はすでに研究心が芽生えていたんです。歴史学、哲学が面白くなってきました。

立正大学に入学したときに、いちばん興味・関心を持ったのは、実は講義の内容ではありませんでした。当時は1~2年を熊谷市の教養部で過ごします。今ここで講演をしている品川キャンパスは、当時は大崎キャンパスと称しておりましたが、教養部所属生の入学式は熊谷キャンパスでありました。式典前にヴィヴァルディの「四季」が流れていました。その日に入学式粉砕闘争が私の目の前で起きたわけです。私は新入生です。でも、在校生によるデモンストレーションはうれしかった。それを見てやや興奮しました。

普通は、何ていう暴力学生だ、ゲバ棒を持って暴れてやがると腹が立ってもいいのだけれども、私は矛盾とかそういうものを自分で引き受け、何かしていかなければいけないという気持ちが強かったですね。サルトルやカミュの読書家だったわけです。それで、後に名付けることになるのですが、「二〇歳の自己革命」というイメージが心中に起きているのを自覚します。

だいぶ後になり、『二〇歳の自己革命』という本を書きます。1969~1970年の出来事を

1996年に、25年ぐらいたってから書いて社会評論社から刊行しました。これはそのときの書き下ろしではありません。ドキュメントの編集です。私は予備校の寮で生活した18歳から日記を綴り現在に至っております。フォイエルバッハやマルクス、ヴォルテールやロマン・ロラン、ドストエフスキーやトルストイの名が記されています。また、^{はたち}二〇歳のころ学生運動をやっていたので、今風に言うとハンドルネームというか、「上条三郎」という名前で学生新聞とか集会パンフレットとかにたくさん論説を書いていました。まずは、しだいに落ち目になって弱体化していく学生運動を論評するわけです。でも執筆活動はそれで終わりませんでした。自分は学問をしに大学に来たのだから、学問をどのようにしていくべきか、そういう論説をも書きました。学問論を構築していく論文が主となり、時事的な評論のほうは、だんだんなくなるわけです。自分が大学に来たのは学問するためだからと、そちらのほうにシフトした論説が多くなっていくのですね。それをまとめたのが、『^{はたち}二〇歳の自己革命』です。

これをまとめたくなったのは、その頃アメリカのコロンビア大学で実際にあった学生運動を題材にして1970年につくられた『いちご白書』という映画がありました。これは面白かったです。学生運動をやっている連中は反体制の実力行使もすれば真剣に恋もするわけです。熊谷キャンパスで入学式粉砕闘争をやっていた人たちも似たような振る舞いをしていたんです。熊谷警察署からみると威力業務妨害、公務執行妨害、道路交通法違反、または凶器準備集合罪にあたる、そういうことをやっていた。ところが活動する学生たちになれば、そこには正義、大義があるわけです。大義があるので、自分たちは犯罪などもつてのほかだ、示威行動は必要悪なのだ、革命的なことをしているのだ、というわけです。

その当時、平岡正明という評論家というか思想家がいて、あらゆる犯罪は革命的である、という名の本を出版しました。好きな人たちの間だけのことかもしれないですが、売れに売れたというか、ね。私はそういう全共闘的時代傾向の中で、逆転したものの考え方、転倒した表現とか思想、これはすごく面白いなと興味をもつようになります。そのときは現在のように〔転倒の社会哲学〕なんてテーマ付けはしていませんが、そういった辺境への越境みたいな眼差しで研究生活に入っていきます。

それで、とりあえずは勉強しなければ先に進まないということで行動にでます。神田の神保町に古書店街がありますが、そこには新刊本屋もあるし、それから洋書販売の北沢書店とか極東書店の販売窓口みたいな洋書センターとかもありました。私はドイツの労働運動を調べようと思ったので、1970年からしきりにドイツ語の復刻文献をあさりに行くわ

けです。

ただ、時代の運命だったのでしょね、結局、そういうものを買うのと同時に、時代を批評する論説の並んだ雑誌を探して買いまくります。例えば『情況』、それから『現代の眼』『構造』『現代の理論』『思想』、お金はあまりないのだけれども、そんな雑誌を買いました。そして、その号を読むと次の号も買いたくなるから、また神田に行ってというようにして、今でも私の書庫にずらっと並んでいます。

それを読んでいく間に、廣松渉という思想家の書いた文章がえらく気になるようになります。この人は 1994 年に 60 歳代で亡くなるのですが、1967～68 年から 70 年代の半ばぐらいまで、文筆活動を通じて活動家の学生たちに相当影響をもっていたのですね。

私は何に引かれたかという、この人は、物事は関係によって決まるという関係論の議論をする人でした。物事の実体的なことより关系的なものが意味をもっていて、その典型は、例えば神だよ。神様は人々に変更できないものとしてあるのだけれども、廣松渉さんの議論の中では、神を否定するしないではなく、その神と向かい合う。キェルケゴールのようなものです。キェルケゴールという人は、神と自分の間、その関係で物事を考える。神は絶対的なものでもあるかもしれないけれども、その神の前に立つ自分がある。だから、類推的な議論をしますと、自分というものが別のものと関係すれば、また別の自分が出てくるわけです。

例えば、いま私はここで皆さんにお話ししている、大学の教師だったりしている。そういう関係でここに今いるでしょう。でも、家に帰れば父親です。それから、これからいくつか話をする場面があるけれども、私はいろいろな関係の中で生きてるので、一つの関係で生きていないので、総体は決まらない。どの関係も自分の現実ですよ。それを特定のものに絞ったりしないわけだよ。

廣松先生が面白いのは、そういう関係論の中で、全部フィフティ・フィフティの議論をするところでした。どこか中軸を持ってきて、それをもとに話をする人ではない。ただ、マルクス主義者、唯物史観の議論をする人なので、あらゆる存在、すべてのもとになるのは、あるいは自分が何であるかというのは、何を生産しているかにかかわる、というマルクスの議論が土台にあります。

しかし、土台、ベースにあるものと、それをもとにどのように人と関係するかは、ある意味、相対的に別物ですよ。少し高じすぎて、あの先生は自分が気に入った人が現れると、ものすごくプッシュしてくる。私も一時期ものすごくプッシュされました。ちょっと

用件があり先生に電話をすると、「待ってください。こちらからかけ直しますから」と言って、ガシャンと電話を切って、かけてきます。その頃はダイヤル式の固定電話の時代です。びっくりしますね。「いや、先生、私が、私が用事あって電話をしているのだから、私のほうからかけたのですよ」。「いや、そうじゃないです。かけ直します」。そう言って切られてしまったらそれっきりでしょう。そういう、ちょっと意外だなというところはあるけれども、彼のそういう行動は後でよく分かるようになりました。

話を戻すと、二〇歳の頃に私は関心の赴くまま、手当たり次第に雑誌を読んでいったのですが、それは全部、自分にとってはフィフティ・フィフティでした。ある人は、例えばそれは革マル系の本だからやめろとか、これは民青だからやめろとか、これは黒ヘルのアナーキストの本だからやめろとか言う人がいました。でも、私はどれもまだ読んでもないのにやめる筋合いもないし、読んで自分と違うものがあったとしても、やめる筋合いはない。だから、そういう意味でそういうセクト的なものにかかわらないで、どことも距離を同じように取りながらやっていたのですね。

そういうグループのことを、セクトにこだわらないので「ノンセクト」といいました。「ノンセクトラジカル」というくくりでいたのですね。私の言い分からすると急進的な行動派でしたが、警察のほうから言うと過激派でした。

そのラジカルな活動中でいちばん必死になってやったのは学問論です。学問論を構築すればそれなりに誰とでも議論できる。石塚にとって、何がベースになるかという、学問論だと思いました。それで「学問とは何か」ということを、一生懸命文章にしました。そのときに役に立ったのは、浪人している頃に読んだ本です。

浪人している頃に読んだ本はロマン・ロランなどフランスもの、ドストエフスキーなどロシアもののほか、今お話ししたように実存主義的なものと、それからマルクス主義的なものです。人間を扱った梅本克己の本だとか、いわゆる人間論とか唯物史観とかです。あまり実証的なことではなかったです。でも、立正大学に来てから、ここで何をやろうかと思うときに、例えばドイツ労働運動史をやるかな、明治維新をやるかな、立正大学は仏教の大学でもあるから印哲をやるかなとか、思わなくもなかった。でも、そういうのは分野でしょう。

(2) 学問論の構築へ向けて

そうではなく、そういうことをやること、学問することは、自分にとって何なのか。学

間は自分にとって何か、あるいは学問の役割は何かということを並行して議論していかなければならないと二〇歳のときに思いました。それで『立正大学学生新聞』に「学問論の構築に向けて」というのを書きました。原稿用紙で 50~60 枚ぐらいあったか、記憶は定かでないけれども、3 回連続で掲載しました。

これが 1 回目です。1970 年 12 月です。このときは先ほど言った上条三郎という名前です。「学問について」というテーマと、「科学としての学問」「科学の幻なる『中立性』」というので始まるのですが、私は政府がその頃に言っていた、原水爆禁止運動の人たちでも言っていた、科学そのものが中立であるというのは絶対うそだと思いました。うそというのは、真実か偽物かというよりも、その議論が眉唾だと、そのように思ったのですね。そのときどきの学問には時代思潮というか思想的



文脈が介在しているはずだ。あるいは、個人レベルでも、何かの思想的動機のもとに研究がなされるはずだ。それを抜きに学問が成り立つわけではない。

例えば、きょうは結構寒い日です。例えば、ここにストーブがあったとします。そうしたら、皆さん、うれしいでしょう。いまエアコンで空調しているからなくてもいいのですが、あればうれしい。それが真夏の 30℃、この頃、40℃近くなるときもありますよね。そういうときに、ここにストーブがあったら、皆さん、うんざりするでしょう。見たくもないでしょう。そこには思想、観念が介在しているのです。これは要らない、これは欲しい。火がついていなくても抱きつきたくなるとか、物事はすべて、何かの思想、観念により、そこに存在意義をもっている。意義、意味は関係の中で決まるわけです。

銚子の犬吠埼にあるホテルで教え子の結婚式があったときのことで。まだ時刻が早かったので、灯台のところから真っ青な海、真っ白な雲を眺めていたら、その近くに若い男

女、たぶん恋人同士がやってきて、私のほうを見る。そこに思想が読まれたのだけれども、その二人は私に間違っただけの思想を読み込みました。「あのおじさん、危ないな。失業したのかな、倒産したのかな」。要するに、これから犬吠埼から飛び込むと思ったらしいです。

私は教え子の結婚式でもあるし、銚子の犬吠埼で、若山牧水ではないけれども、海の青、空の青にも染まず、白を自己主張している水鳥かなんかが飛んでいたり水面にいたりするわけです。「ああ、いいな」と思い、確かにジッと一点を見てたのでしょ。でも、私の思想はピンク色に近いような青だった。教え子が結婚する日だから。

たぶん、その二人もラブラブだったと思うので、彼らも真っ青な空を見て、ピンク色に見えていたと思うよ。二人はその後、チュッとしようと思ったぐらいだったと思うよ。でも、横を見たら、つらそうなおじさんがいるなど見るわけです。それを、文脈ともいうし、コンテキストともいう。でも、そういうものは関係性の表れでもある。

私の『^{はたち}二〇歳の自己革命』はまさにそれで、大学に入って普通の人だったら、例えば歴史学の場合だったら、西洋史を選ぼうかな、日本史にしようかな、考古学にしようかなと、そういう議論でしょう。そうではない。学問をするって何かなということを考えないと進まないのが、私の第一の印象だった。

私の意図をパンフレットかなにかで読み知った立正大学学生新聞会の編集人、彼は深田卓といいます。その後、独立してイザラ書房という出版社から『インパクト』という月刊誌を発行しました。その後、『インパクション』という名前が変わるのですが、インパクト出版会というのを創立します。雑誌は休刊となっていますが、出版社は今もあります。

その彼が編集する学新に私の学問論が連載されたのですが、第1回のリードに〔「関係」としての思想〕とあります。これは私が書いたのではなく、深田卓編集長が書いた。彼も私も、廣松さんの影響をはっきりと刻印しています。そのとおりです。そういうことを明確にしていたのは私であると同時に、この時代です。この時代、例えば立正大学の学生運動が、私という人間をつくり出したのです。それはいま振り返ってみたら、「そうだ、一人でできるようなことではない」と思う。

そして第3号目には、私の記事の右に面白い人間の記事が載りました。中村禎里^{ていり}さんです。立正大学の自然科学、生物学の教員です。1974年に『ルイセンコ論争』を出版した方で、科学哲学、科哲と言ってもいいかもしれません。この方の原稿がたまたま私の第3回目のところに載りました。

彼の議論は「近代科学の成立」とか「生物工学の思想」で、私の3回目は社会科学「批判」といって、科学は批判されなければいけないという論調で、これを読んだ中村禎里さんは、私が学生で彼の授業を受けたり



して優良可とももらっているわけですが、筆者が上条三郎というペンネームですので、しばらく分からなかった。

私は史学科に入ったのですが、大川富士夫という東洋史の先生がいらして、この方が50歳過ぎたぐらいで急死してしまいます。そのお葬式のときに寺に行ったら、鉢合わせになったわけ。それで白い歯なんて絶対に見せてはいけないのに、「石塚と会えた、うれしい」。

「先生、わたしゃ、記事と一緒に並んだときはびっくりしたよ」と言ったら、「あれ、石塚君だったのか。いや、ませている人間がいると思ったのだけれども、そうか、そうか」と、愛着をもって私に言って下さいました。この方はこのあいだ亡くなりました。生きていれば私よりも15歳ぐらい上で、85、86歳になる人ですが、死ぬまで私の議論を見守ってくれました。没後の2017年に『日本のルイセンコ論争』の書名で復刻が出ました。

とにかく面白いよね。「大学で学問するとは何か」というのをやったときに、こういっては何だけれども、まっとうな先生は私を相手にしません。「石塚君、お前はまだ若いから、そのうちに分かるよ」「一生懸命勉強していなさい。そのうちに学問とは何か、研究とは何か、分かるから」とおっしゃるわけです。

しかし、研究職のことを私は言っているわけではないです。准教授になり、教授になっていく、そういったことを言っているのではない。「学問するとは何か」というのは、私生活といっっては言い過ぎだけれども、生活過程でつかまなければいけない。学問が生活なんだから。学生をやめたら、大学をやめたら研究をやめるというのではないです。でも、多

くの先生は大学をやめると同時に本をどこかに寄贈したり古書店に売ったりしてしまう。体力的なこともあるから、リタイアせざるを得ない部分もあるだろうけれども、そうではない。

そうではない教員が私の恩師にはいました。骨太というか、すごい先生がね。具体的なことはあとで紹介しますが、亡くなるほんの数日前まで一緒に教育問題を考えた酒井三郎、酸素マスクをしながらでも一緒に翻訳したりした大井正、脳梗塞になってもベッドに本を置き、危篤で私が飛行機で病院に駆けつけ、その先生の手をさすっていたら、「あっ」と気が付いてくれた布村一夫。そのとき布村先生はなぜ私に気が付いたかという、彼が生涯をかけて研究したテーマを私が何度も口にしたわけです。ペンだこのある右手を一生懸命さすったら、周りで見ている関係者の人たちが、「石塚先生、右手はもう感覚がないですよ」という。けれども、私にやれることはそれしかないから、「先生、先生、モルガン、モルガン」と連呼しました。モルガンというのはアメリカの比較民族学者です。そうしたら「あっ」と目が覚めましたよ。それこそが研究者の意識でしょう。

簡単に言うと、歴史学は何かとか、民族学は何かと言わなくても、その人の生き方を見ていけば分かる。二〇歳^{はたまたま}の頃に「学問をするって何なのか」ということを先生に問い詰めてくる学生と、膝を交えて議論しなければ、その先生は教育者としては不適格ですよ。その呼吸が合ったというか、適格者の一人が、さきほどお話しした中村禎里さんです。ほかにもいます。わが恩師5人です。

私は学部の時代から、いえ、浪人当時から決めていました。卒業論文を書こうなんて、意識にないです。卒業論文ではなく、自分の学問をする。それで私がいちばん関心をもったのは、ドイツの職人運動です。19世紀の半ばぐらいになるとしだいに滅んでいってしまう手工業職人の研究をしました。

なぜか。その時代、19世紀の中頃になると、いわゆる賃金労働者が増えてきて、旧来のギルド、ツunft、手工業は組織もろとも潰えさるといふか、そういう階層でしょう。だから、結社をつくって革命を起こします。昔のものを壊されたら自分たちは生きていけないから、後ろ向きの革命を起こすわけ。これが私にはものすごくビビッと心に刺さった。ただのノスタルジアではないです。なぜかという、昔のところのほうに、むしろ現実有効性はあるだろうからです。賃金労働者になり、近代的な階層になっていく人たちに託すのは、一面、もちろん意味があります。それはカール・マルクスが『資本論』まで推し進めた理論に出てくるプロレタリアートという存在です。

しかし、私は 1968、1969 年のころに学生になった。そのころフランスのパリをはじめとして、各地で学生反乱が燎原の火のごとく広がったわけです。でも、そのとき欧米の組織労働者たちはほとんど何も動かない。でも、いわゆる第 3 世界とって、アジア、アメリカ、ラテンアメリカの未組織労働者たちは動いた。動いたのは、賃金労働者とか近代的な労働者とは言えないほうの人たちでした。

先ほど香港の話をしたけれども、香港の人たちだって本当は暴力なんて振るいたくないと思っているよ。でも、あれだけいろいろな問題で中国政府が後ろにいて、香港政府が北京から指令を突き付けられ、ああやって弾圧しているのを見たら、普通の市民だって学生を支援したくなる。血を流すのはいやだけれども、そうせざるを得ないのは理解できる。そういう市民というか民衆の心の動きは、むしろ滅ぼされていくほうにあるということです。そのような問題意識でもって、私は学生時代にドイツ手工業職人のヴァイトリングを徹底的に調べていきました。

(3) 叛徒と革命

そうしたら面白いことがたくさん出てきて、200 枚ぐらいの論文になりました。その途中で大学 4 年生になったので、160 枚ぐらいで卒業研究を仕上げたのですが、私はそのためにやっていないわけだから、それからあと 2 年ぐらい続け、450 枚ぐらいになった。そのときに先ほどお話しした、学生新聞の編集長をしていた深田卓君に話をして、彼はそのころ大学を終わってイザラ書房という出版社の社員をしていたのね。それで、「石塚君、うちで出せるよ」と言ってくれました。そして、25 歳のときにイザラ書房からヴァイトリングの本を出すのだけれども、書名は『叛徒と革命』としました。それで、叛徒というのは「反」でなく「叛」にしたかった。叛乱の叛。良家のお坊ちゃまが付けるような名前ではない。ちなみに、イザラの顧問は清水多吉先生で、私の原稿を査読してくださった。

書名を「叛徒」としたからといって、それは学問などしたくない、政治闘争がいい、というのとは全く違う。学問とは何かということを考えれば、当然「叛」だろうね。ヴァイトリングは手工業職人という階層の利益を考えれば、それを壊しにかかる資本家と徹底的に闘ったわけだね。それはよく分かる。でも、「君たち、手工業職人は滅びゆく階層だから、ジタバタしても駄目。時代がお前たちを乗り越える。だから、もうあきらめて普通の賃金労働者になりなさい」というマルクス流の説教など、できません。みんな家族を抱えているし、自分だって生活ができなくなるでしょう。だから、「叛徒」というのは別の見方

をすると、その時代を最も素直に生きようとする人たちではないか。

香港の話ばかりを出してしまいましたが、叛徒の暴力を抑える力を私は **force** (フォース) としています。抑止力といえば聞こえはいいですが、実際は鎮圧力です。それに抵抗していく力、叛徒の暴力を **violence** (ヴァイオレンス) としています。武力抵抗を含みますから過激なので、**violence** というのはまっとうな市民は嫌う。でも、居ても立ってもいられなくて、**force** に対し抵抗していこうとする人たちは、**violence** に打ってでます。そのところが、このヴァイトリンクはすごいのだね。組織力がすごい。

これは、イザラ書房から出したその本の表紙です。私の最初の作品として、これはうれしいということのほか、学問とはこうなのだ。学問をやろうと思ったら、こういうものになるのだという、一つの証のようなものでもあります。

当時のイザラ書房を紹介します。私が本を出した1975年の頃、どんな本を出していたか。宣伝広告を見てください。『クーデターの技術』、そうかと思うと『キルケゴール』『革命とコンミュン』。これは『ヘッセンの急使』を書いたゲオルク・ビューヒナーという農村で徹底的に抵抗する人。あとは『攘夷論』とかね。著者の片岡啓治さんはシュティルナーの翻訳者です。マックス・シュティルナーの『唯一者とその所有』を訳した人です。関心のおおらかさが分かるでしょう。攘夷論とアナキズムのとりあわせ。



(4) 学問の使命と知の行動圏域

私は来年2月に民俗学のフィールドワークをするために^{チェジュ島}濟州島に行きます。あそこの漁師は海に潜ります。日本では海女といますが、その海女さんの生き様、生活文化を調査に行きます。海女さんといえば、私は日本の志摩半島の海女さんなどしか知らないけれども、昔から濟州島の海女さんたちは日本沿岸に潜りにやってくる。ものすごく安い賃金で働かされます。でも、この人たちはどこでも行く。それでも濟州島では労働主体ですし、この島は母系社会です。

この濟州島は、韓国本土とはまた違う歴史をもっているのですが、それだけに、屈折し

ています。先ほどの攘夷論ではないですが、島の人たちは抗日運動を徹底的にやる。日本に対し戦うのだけれども、何をまもるためなのでしょう。李氏朝鮮のころは、朝鮮国王のことをチョウナといい、その上に支配者の中国皇帝、ペーハーがいます。尊王攘夷を思いやると、濟州島の人どころか、韓国、李朝の人たちはみんなチョウナでなくペーハーをまもることになります。朱子学をベースにした事大主義です。こんな矛盾したこと、ないでしょう。韓国の旅行も今度行くと7回目になるのですが、それをけっこう感じています。朝鮮本国における事大主義の傾向は、李朝支配階層の両班やんぼんの流刑先であった濟州島にはいつそう屈折し転倒した歴史が刻まれます。

私の学問とは何かというときに、必ずそういう屈折、転倒が出てきます。右へとベクトルを進めているはずなのに、どういうわけか左へと進むよう運命づけられるような、そういうテーマがあります。イザラ書房はこの後、方向が変わっていきます。人智学運動や自由教育推進で知られるルドルフ・シュタイナー関係を扱うようになり、イザラは私のような「叛徒」を扱わなくなる。社長も代わって行くのだけれども、そういったイザラの展開を見据えて、時代が変わっていくなと思いました。

そういう中で、私にとって1996年に社会評論社から刊行した『はたち二〇歳の自己革命』は、私の学問研究における第一段階、「学問する社会運動家」という段階の総括本のようなものです。つい先月に社会評論社から刊行した『学問の使命と知の行動圏域』、そこに『はたち二〇歳の自己革命』に載せておいた論文の多くが採録されています。第一部の前半は、『はたち二〇歳の自己革命』（第1章）、「学問論の構築に向けて」（第2章）、「学問するノンセクタリカルズ」（第3章）、ここまではいま私がお話ししたものです。後半の最初は「戦争と学問」（第4章）で、私の恩師に関する学問論です。布村一夫、大井正の二人は、戦争中に国策会社の満鉄（南満州鉄道株式会社）に勤めていた。ロシア語の読める布村先生はマルクスの著作、とくに土地制度とか資本主義的生産に先行する諸形態などをロシア語で読みました。それから大井先生はインドネシアの民族研究をさせられる。インドネシアに日本が侵略しようとしているから、そのための調査です。けれども、ヘーゲル哲学者の大井先生もしたたかに専門の哲学研究と関連させていきます。布村先生はマルクス主義の文献をロシア語で読めと言われ、大井先生はインドネシアの生活、農耕儀礼を研究しろと言われ、「はい、はい」と言いながら、実は自分に役立つものを一生懸命研究している。

その次の「新たな科学論の構築へ向けて—フクシマ以後における」（第5章）というのは、2011年3月11日に福島原発が電源を喪失して爆発した事態を受けて、その事故を、私の

学問論・科学論にいつそうの確信を植え付ける素材にした論文です。それは見たことか、言わんこっちゃない、核科学というのは必ず思想を含んでいるのだ。思想を抜きにして核技術は語れない。だから、そういう意味で福島以後は新しい学問論の構築が求められるのだよ。石塚は二〇歳^{はたち}のころから言っているのだけれどもね。ということで、序文の文章は、私が 1970 年執筆の「学問論の構築へ向けて」で学問の中立というか無謬性は幻想だと主張してあった、との指摘から始まっています。

第 6 章「人間学的〔学問の自由〕を求めて」はついこの間、書いたのです。いま政府は大学に軍事研究を押し付けてきます。しかも、科学研究費の分配という兵糧をちらつかせながら。先月には千葉市の幕張メッセで国内初の武器見本市が開催されました。私たちの意識の中に軍事が当然のような雰囲気醸し出しています。そういう時代に今はなった。

私の勤めている東京電機大学の研究者、技術者の中には、「石塚さんはそう言うけれども、私なんかいろんな企業と共同研究をやっていて、その中には軍事技術や武器の部品もあると言われます。だから、研究してはいけないと言っても無理だよ。否が応でもそうになっていく」と言います。私は、その現状をダイレクトに批判してはいないよね。そういう方向を受け入れる大学の在り方を倫理問題として考えなければいけないということを書いた。それが第 6 章です。

7 章は先ほど言った「フォースとヴァイオレンス」。私は『叛徒と革命』では、革命を弁護しています。もっと言うと、「革命的暴力」を支持すると記しています。ただ、その内容の詰めがあまかったので、ずっと悩んできました。だって、字面だけ読んだら、石塚は暴力主義者だと思われるでしょう。思われても仕方がない文脈なわけです。

だいたいその頃は中東のアラブ諸国に日本赤軍とかが行き、いろいろな国際的な事件を起こしている時代だったのね。だから、その行動を擁護すれば、当然、過激派中の過激派のように私は思われる。けれども、いや、そうではない、私が支持したのはフォースでなくてヴァイオレンスだよ。ヴァイオレンスはフォースに強いられなければ発生しない。だから、フォースがあつてのヴァイオレンスというのを私は研究しているということです。それを自分なりにはっきりと整理して発表したかったのです。それがこの第 7 章です。

これは 70 歳の区切りと思って、つい先月出したのだけれども、よかったな。これを読んでもてくれれば、石塚さんの暴力論、その真意が分かりますよというわけです。以下、第 2 部はエッセイがたくさん並んでいるのですが、読んでみてください。そういうことです。

Ⅱ、学問する社会思想家

次に、Ⅱの「学問する社会思想家」に進みます。この段階で私は研究者になっていくわけです。社会運動家というよりは、大学院に身を置いていっそう学問するようになります。それでどんなことを研究したかという内容を概略紹介したいと思います。

(1) ブランキ「計画としての陰謀」

これはすでに説明済みですが、『叛徒と革命』で提起した事柄です。研究上、ブランキはよく陰謀家と称されます。暴動を起こすにはまず主観的に陰謀を計画し、陰謀に賛同する連中だけで主観的にふつつつと気持ちを高揚させていき、煮詰まったときに「それ一つ」と少数者の暴動を起こす。そういうのをブランキズム、ブランキ主義とってきました。こういったステレオタイプを定式化したのは、マルクスと歩調を一緒にしていたエンゲルスです。

でも、ブランキを読めばすぐ分かることですが、彼はまずは絶対に計画を知られないように綿密に立てなければいけない、陰謀を悟られないために、秘密でなければいけないとっています。スパイが入り込んできて、バレたらどうにもならない。バレないためにはお互い同士まで連絡を絶ちます。トップの人がいたら、その人と2人の関係しか知らない。そのトップの人に部下が5人いれば、トップだけがその5人を知っている。そして、絶対に横の連絡をとらない。そのように組織をつくっていきました。

それは間違いなく陰謀です。「陰謀」というのは日本の言葉だと悪い意味でしか使わないし、今はあまり使わなくなった言葉かもしれませんが、そういうものは革命を起こそうと思ったら当たり前で、それを肝に銘じるよう誓い合っただけです。でも、エンゲルス、あるいはその後の社会主義者は、こういう陰謀をめぐらしていたら市民との結びつきはなくなるから、こんなのは駄目だという。ですが、皆さんご存じのようにロシア革命も陰謀中の陰謀で起きてきます。

ロシア革命では、革命派はどうにもならなくなった議会を現実には軍事占拠し、そしてつぶしていく。暴力革命を起こすのだよね。でも、レーニンたちのやったことを、その当時は「陰謀」とは誰も言わない。ポリシェヴィキの革命は、用意周到に訓練された労働者革命家とか職業革命家などがつくっていき、そして工場労働者とかが蜂起する。だから、そういう意味で言うと、蜂起を組織するという観点でもって行動している。

だから、「ブランキストを非難するとして、非難しているあなたもブランキストですよ」というのが私の言い分です。マルクスにもエンゲルスにもレーニンにも、みんなブランキストの要素はある。みな結局、間違いなく陰謀をめぐるのだから。そして、それをポジティブに考えればいいわけです。19世紀を通じて豊かな事例を産みだした革命結社です。マルクスもかかわって1848年革命直前に結成された共産主義同盟、これは紛れもない革命結社です。現代から逆読みする人がいるので困りものですが、国民政党的先駆ではありません。

私の信念から結論しますと、権力を目指そうとする力はみんな腐敗する。虐げられているときは、ヴァイオレンスでやります。でも、権力を握ったら、やがてフォースになる。それは20世紀の中共革命もベトナム戦争も、みんなそうです。権力を握り、国家権力を握るとヴァイオレンスはフォースに転落する。中国のチベットとかウイグルとかへの弾圧政策、今すごいでしょ。あれはフォースです。香港は間接的だけれども。

そのように権力を握ると、フォースになります。でも、ヴァイオレンスのときの陰謀と、フォースのときの陰謀は違う。陰謀は陰謀で同じといえばそうだけれども、私はそれを分けます。そして、ブランキはヴァイオレンスの陰謀をめくらしていたのです。現実的にはぶん殴れば痛いし、血も出るし、同じ現象です。でも、ベクトルが違う。

これは私が1990年代に長く一緒に活動した白川真澄さんが『ピープルズ・プラン』83号(2019年2月)の記事「革命的暴力と抵抗の暴力」で一生懸命言っており、面白いと思いました。その白川さんは、「石塚さん、私も60年代から闘ってきているけれども、どこがどのように整理できるか」というと、権力を取らないということで、最近、自分をはっきりしてきているのだ」とじかに言ってくれました。私もほぼ同じ意見に達していたのですが、彼も同じころに文章に書いていて、それが【計画としての陰謀】の中に入ってくるのでしょね。ブランキがそこまで考えていたか。「お前、ブランキに会ったことないだろう」と言われれば、そのとおりですけれどもね。

(2) ヴァイトリングの社会的盗奪

そのブランキに影響された面もあるヴァイトリングも、また面白いところがあるのだな。社会的盗奪(Sozialbandit)、これは日本的に言うと、義賊・匪賊です。支配者が労働者あるいは農民をギューギュー搾り、年貢、税金をたくさん取って蔵に納めたとしましょう。そうしたら、蔵の中身は本来、農民、労働者が産み出したものだから、取り返していいん

だよ。

地主や資本家が農民や労働者から搾り取るのはプライベートな行為、つまり私的な盗奪だ。しかし、農民や労働者をやるのは社会的な盗奪だ。個人に奪われたものを社会へと奪い返せ。社会的盗奪はヴァイトリングが活動した 19 世紀の中頃まで、けっこうな勢いで実際に存在しました。スイスアルプスからボーデン湖とかあの辺をずっと流れて下るライン川のようにいくつかの国をまたぐ地域で社会的盗奪は出没します。

その時代的現象を知って戯曲を書いた文学者がいます。ゲーテと並ぶシラーです。シラーは『Die Räuber』という戯曲を書きます。Räuber というのは盗賊、強盗の複数形で、盗賊と言ったら身もふたもないのだけれども、日本では「群盗」と訳しています。ロマンチックです。シラーが見たのは、これです。やられたらやり返せ、奪われたら奪い返せ。

それをヴァイトリングは 1840 年代中ごろに革命手段として採用するわけです。でも、同時代人のマルクスたちは相手にしない。泥棒を奨励するような職人なんて、はなから相手にするなどと言います。時代はそうではない。フランスの民法とか刑法とか、要するにナポレオン法典というか、ああいうのがモーゼル川を通じてドイツに入ってきているので、泥棒は泥棒でしかないのだというわけです。

でも、マルクスも若い頃、ちょっと悩みました。1842 年頃、社会的盗奪に同情します。今は私的所有の時代です。自分の土地、自分の財産が法的に決まっているでしょう。その昔は、日本では入会地といったのですが、ナポレオンがやってくる前のドイツ西部では、農民が共同で用役をしていい耕地、牧草地とか森林とかがあった。例えば牧草地に自分の飼っている山羊や牛を連れていき、草を食わせる。落ちていた枯れ木、生えている木でもいいのだろうけれども、それを取ってきて、自分の家の煮炊きに使う。こういうことは慣習法的にオーケーでした。

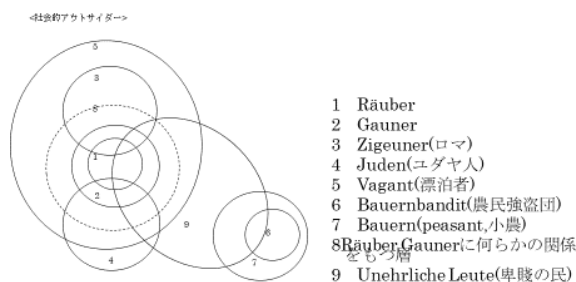
ところが、あるとき禁止され始めるわけ。それは例えば 1830 年代、モーゼル川の領域で起きてきました。その現象をマルクスのお父さん、ハインリヒ・マルクスが見て、農民の弁護を一生懸命します。農民は悪くない。彼らは入会権を行使しているだけだ、悪くない。その息子のマルクスも『ライン新聞』の論説委員として、一生懸命書きます。そのときのマルクスは、社会的盗奪の歴史的意味が分かっていた。でも、その後、彼はそうした所有論から距離を置いていきます。

このあいだ、マルクス生誕 200 年を記念した映画『マルクス・エンゲルス』という映画を、今この会場にいらっしゃる中島浩貴さんから借りてみたのですが、それを見た人は思

い出してください。冒頭、農民が森の中で警察に追われて捕まっている場面です。あれが入会権を行使した農民が蹴散らされる場面です。モーゼル川近辺の農民たちがその辺で焚き木を取っていて、官憲に追われている。冒頭から、いい場面で始まったなど私は思った。しかし、マルクスはそういう議論にはその後加わらなくなっていきます。でも、そういう価値転倒の現場に関心を持ったから、今にして思えば、私の〔転倒の社会哲学〕はここにルーツをもっていると思うね。これだ、近代人には相手にされない転倒の手工業職人を研究したい。こちらのほうをとことんやっていきたいと思いました。

これは、その泥棒団の図解です。ある著作（C.Küther, *Räuber und Gauner in Deutschland, Das organisierte Bandenwesen im 18. und frühen 19. Jahrhundert*, Göttingen 1976.）を読んで私が独自に描きました。1 から 9 まで番号があり、1 は Räuber

で、いちばん真ん中、盗賊です。2 番は Gauner、訳せば強盗。同じようなもので、1、2 が並ぶでしょう。3 番目、Zigeuner、これは今までジプシーと訳されてきたのだけれども、今は「ロマ」といっています。人間という意味です。5 番目、Vagant、漂泊者。要するに、居住地を定めなくて、漂泊している人たち。中



※ ロマ、ユダヤ人か人種、宗教による分類。ロマの生活様式は一応漂泊と考える。卑賤の民は主に職業的分類。漂泊者のサークルにはいない部分は定住者と考える。なお上図には、がらみ平面化しえない部分を無理にそうするためのゆがみがある点を付言しておく。また、Räuberも Gaunerも適切な訳語がいまのところみあたらない。

近世の日本でも飴売りとか薬売りとか、たくさんいました。昭和の前期、いや戦後でもまだ魚売りとか、行商している人たちはたくさんいたけれどもね。

6 番の Bauern は農民です。英語で言うと、peasant。Bauern といっても農場主 farmer ではないです。農場を持っていない貧農 peasant。ミレーが「落穂拾い」を描くでしょう。あの慎ましい世界です。落ち穂を拾っている農民は気の毒なのだよ。ファーマーが刈っていった後、もう見捨てた、もうどうでもいいと思った残りかすを拾って生活している。それが peasant。あと 7、8 番は盗賊世界に何らかの関係があるというか、こういう図を描きました。

ヴァイトリングはこういう人たちを革命に動員しようとするわけ。こういう人たちの思いをヴァイトリングは汲んだというか、自分もそういう生まれだけれどもね。彼自身、フランス革命のときに、フランス兵とマクデブルグの洗濯労働女の間にも生まれました。ヴァイトリング自身はフランス人でもあるしドイツ人でもある。逆の言い方をすると、どこに

も居場所がない。漂泊です。そういうところから、こういう人たちと連携していくべきだとつकんだのでしょね。

(3) カブラルの【絶対文化】

暴力論でもう一つ、悩んでいた私をすっきりさせてくれた運動家に 1980 年代に出逢います。60 年代から 70 年代にかけ、アフリカ西海岸のポルトガル領のギニアとカーボベルデという島があるのですが、その国をギニアビサウと言います。その国の独立運動を指導していた人物にアミルカル・カブラルがいます。1973 年に暗殺されてしまいます。そのときは日本であまりニュースになっていませんが、この人の暴力論はすっきりしています。

カブラルは、自分たちの文化を大事にしろという。そして、小さい地域だけでもギニアビサウには多様な階層がいることを問題にします。ポルトガル人は植民地の海岸でしか商売をしません。ドイツ人とカイギリス人は内陸を開拓するのですが、ポルトガル人は港でしか商売をしないから、港にいるギニアの人たちは頭がよくなります。お金が入るから、ずる賢くなるかもしれない。内部にいる人たちは中世的な農業を営む。もっと奥地の人たちは呪術的な、あるいは石器を用いた生活をしています。カブラルはポルトガルと戦争するときに、そういう様々な人たちを兵隊にするのですが、みんな文化が違うから困るわけです。

でも、彼等を総動員していかないと絶対に独立できないと思い、例えば一番奥地にいるアニミズムのような習俗で暮らしている人たちを戦争に行かせるとき、彼らにとっての分化である呪物を尊重します。呪物に祈願しないと戦争に行かないわけ。ワニの鱗でもライオンのしっぽでもいい、何らかの呪物を持って戦場に赴くわけです。当然、鉄砲、機関銃で撃たれるから手持ちの呪物では歯も立たない。そこで彼らは呪物をいっそう威力のあるのに取り換えます。「これからはあれが俺たちの呪物だ」といって、ポルトガル兵から鉄砲を奪い、それで敵を倒し、意気揚々と村に帰ると、元の呪物があった祠にその機関銃を置き儀礼をする。儀礼をしないと呪物神になりません。これを私はフェティッシュ神としていますが、とにかく固有の文化を壊さないまま、自ら変革していく。そのような指導を自然にやっけるカブラル、これはすごいことだな、この人はずば抜けているなと思ったものです。

ギニアの民衆は、もとは平和な闘争、独立運動をやっていたのだけれども、1953 年にサントメ島で、1959 年にはビサウ港のピジギチ埠頭でポルトガル軍による大虐殺が生じ、現

地の人たちはたくさん死んでいった。それを見て、カブラルは、これは駄目だと意を決し、地下に潜って武装闘争を組織しだす。また、武装もするけれども、もう一つやったのは野営地というか戦争に向かうテントで、少年とか文字を知らない人たちに学習させます。戦場でも日々勉強して、自分たちの文化を大事にして、そして武器を持たせる。

そのときに捕虜になったポルトガル兵たちはそれを見て二度びっくりしました。ポルトガルはもともと二流、三流の資本主義国で、識字率はたいしたことないです。文字を読めないポルトガル兵が多い。それが捕虜になってくるでしょう。ギニアの少年は文字が読める。勉強している。それを見てカルチャーショックを受けたということです。そういう意味でもカブラルの指導力はすごい。

私はこのカブラル思想に接したおかげで、『叛徒と革命』を書いた頃の革命的暴力、それはヴァイオレンスとしてちゃんと議論していけば、メリハリがついていくのではないかと思ったのです。11月に社会評論社から『学問の使命』を出版したとき、香港は若者によるヴァイオレンスばかりで、それを見聞きしてある読者なら、「石塚の議論も50年たった今となると、彼がフォースとヴァイオレンスに腑分けするのも納得できる」と言ってくれるのではないかと思います。

これは、このあいだ6月に出版しました『アミルカル・カブラル—アフリカ革命のアウラ』（柘植書房新社）を記念して多摩美術大学美術館で講演しましたが、そのときのタイトルページです。

カブラル・文化による抵抗

—エターナルアフリカ記念—
多摩美術大学美術館 20190727
石塚 正英

1. 私にとってのカブラル・アフリカ・地中海
2. 階級闘争がないから歴史がない？
3. インターライブの文化
4. アフリカ人の哲学世界観
5. エンクルマ評価—プラスとマイナス
6. ギニア社会の構造分析
7. 悪霊のすむ森、隠れ家の森
8. ポルトガル兵の文化的敗北



(4) ド・ブロスとフォイエルバッハのフェティシズム

私の研究の奥深いところというか、ベースには合理主義や科学知によって拒否された、先住民的、先史的な文化への接近があります。その代表がフェティシズムという人間精神・儀礼行動です。基本的には宗教前の儀礼ですが、これは価値転倒そのものの儀礼なわけで、善と思う基準、悪と思う基準は、ある儀礼により入れ替わってしまう。その儀礼をフェティッシュという神を持ち出して執り行います。人はフェティッシュを崇拜し、信仰する。しかし、あるとき、役立たずになれば違うフェティッシュに代える。その好例は先ほどお話ししたポルトガル兵の持っていた鉄砲です。ワニの鱗を機関銃に代えていく。フェティッシュそ

のものの信仰は持っているけれども、フェティッシュという神が、自分たちと相対していて使い物にならなかつたら捨てていってしまう。

現代人であれば、これは善なのだという基準は決まっている。でも、フェティシズムの世界では入れ替わることがあるわけです。それが私の研究で土台になっているものなのです。来年 3 月頃に社会評論社から刊行予定の『価値転倒の社会哲学—ド・ブロスを基点に』でまとめます。

それから、価値転倒の社会哲学の観点からもう一つ、フォイエルバッハの〔他我〕を説明します。これは基本的に自然もみんな人間と同じだという位置付けです。他我、alter-ego というラテン語です。エゴというのは私という意味だからね。自然であるうが、目の前に人間がいようが、それらはみな、〔もう一人の私〕

だという位置付け。これは本質論からいくと、転倒が始まっています。来月つまり 2020 年 1 月に社会評論社から刊行します『フォイエルバッハの社会哲学—他我論を基軸に』で全面展開してあります。

いま私は 1 本論文を書いていて、来年 3 月に『理想』という雑誌に載せるのですが、西田幾多郎の『純粹経験』への眼差しです。その中で西田さんは本質論ばかりやっています。それを見て、日本の思想界は日本的な素晴らしい哲学者が生まれたとって来たのだけでも、彼は神と愛、それから人間、これを本質的に捉え、永遠不変のものとみなすのですが、私にすれば、それは違うのではないか。

神様も他我、神様ももう一人の私だ。永遠不変なものというよりは、私とあなたの関係がいろいろ変わっていく。その中で二者の関係がある、そういう関係は永遠不変だ。相手がどのようになるか、もちろん自然がきたり、別の人間がきたりという意味では、変わりますが、他我、我と汝、私とあなた、そして、私に対してあなたはもう一人の私という関係、これは不変だ。そういうことを受け入れると、ときどき転倒するでしょう。だって、あなたが私になったら、私はあなたになるでしょう。そのようにして、自分はある人の対象になるわけです。そして、逆のときは、相手が私の対象になるわけ。そのように主客が入れ替わる。

西田さんはそれを否定した。西田さんは言いました。主客は同一、主客は統一されているものだ。知識がつくと分裂する。だから、それをもう一度、統一しなければいけない。統一は宗教にこそあらわれ、神がその統一者だ。主客というものは、もともとないのだ、



分裂以前がもとなのだと主張する。私の論文の執筆目的は、その主張への批判ですね。

またフォイエルバッハにもどります。「我と汝」の他我論を彼はライブニッツあたりから捨てており、フォイエルバッハの造語ではないです。術語自体はラテン語で前から知っているのだけれども、中身、概念を入れ替えています。エドムント・フッサールもこれを使っています。フッサールの現象学で、これは重要な概念です。でも、私はフォイエルバッハがいちばん気に入っています。自然も動物もみんな他我なのだ。痛いと感じずる動物、それが他我で、痛くない、痛みを感じない動物は他我でないという問題ではないです。森羅万象が他我です。でも、他我という概念をあまり抽象的には使いません。自分と相對したときに備わる。何でもかんでも他我というように、漠然と言っているわけではないです。

フォイエルバッハは 1850 年代までに南米とかアフリカとか、そういう地域に関する博物学、人類学の報告書をたくさん読みます。それで知っていくわけ。アフリカとかアメリカの先住民の文化を知っていく。それで他我という議論をライブニッツ的な議論から、私がいま言っているようにオリジナルに変えていきます。ヘーゲル哲学の枠に収まる議論はありません。とても面白いです。

(5) バッハオーフェンの母方オジ権

さて、さらにもう一人。ヨーハン・ヤーコブ・バッハオーフェンの母方オジ権、これもまた一つの概念をひっくり返しています。私の話を聞くと驚くよ。結論を言うと、母も父だということ。問題は、父という言葉 **pater** です。ラテン語の **pater** に、最初は「父」という意味などないです。日本古代の語彙でも妻は女とは限らなかったでしょう。妻はパートナーという意味でしょう。男も妻だよ。女も妻です。でも、その後、妻といたら、パートナーは女だけになっていった。

それと少し違うのですが、バッハオーフェンは 1861 年に『母権論』をバーゼルで出版するのだけれども、そこでの議論を紹介します。母権は物的な権力ではなく、どちらかという心情的な権威のほうです。あるいはモラルというか。お母さんだけは自分の産んだ子どもを知っている。それから、氏族の中で子どもは育ちますが、お父さんは別氏族にいる。お父さんはときどきお母さんと子どものいる氏族にやってきて、夫婦の仲を契る。お父さんはまた元の氏族に戻っていく。

ならば、たいがいはお母さんが子どもたちの保護者でしょう。そして、ラテン語 **pater** の「pa」は保護、「ter」は人を意味します。「pa」する人で「pater」、保護人となります。

お母さんが保護者だったころから **pater** という言葉はある。そのころはまだファミリーが生まれていない、あるいは確立していないので、お父さんは一緒に住んでいない。なので、子どもたちがお父さんに育てられること、保護されることはないわけです。言語学的にも社会組織的にも **pater** という言葉が最初に当てはまるのは母たちです。私の独断のようなもので、みなに反論されるかもしれないけれども、もともとはお母さんが **pater** であったこともある。

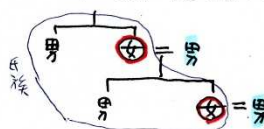
これは単純に描いた図ですが、一番上の第1段階は、赤い丸が相続者ですから、お母さんから娘へと相続していて、青い線で囲ってあるのは氏族と書いてあるでしょう。clan のことです。その中にお父さんはいません。第2段階でもいなくても、相続するのは女から男に変わっているでしょう。ここで男の時代に少し入りますが、まだ兄弟のことです。母方のオジ。その人たちにすると、この女の子、男の子にすると、お母さんの弟とか兄、母方のオジ、母方オジの力が非常に強い段階のことを母方オジ権といいます。第2から第3段階にかけて、そのころは母方オジが **pater** です。これをバツハオーフェンは80年の死ぬ間際になり、ものすごく研究します。この存在が大きいです。

やがて第4段階になると、氏族を解体してポリスがどんどんできます。ポリスは政治国家だから、これはポリスの基本形です。お父さんが妻と子どもをみんな奪ってしまう。そして、元の氏族はないから、こちらは関係ない。母方のオジはもう関係なくなる。これが **pater**、お父さんが生まれる段階、すなわち家族の成立です。

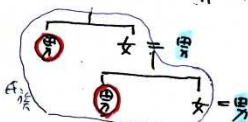
そういうことで、**pater** には父親という意味の前に、母方オジも **pater** だったし、母も **pater** だったという議論をするといいいのではないかと思います。旧約聖書でもヤコブがラケルという奥さんをめとるときに、ラケルのお父さん、ヤコブの義理のお父さんになるラバンのところで7年間働き、それで妻をめとって出ていくわけです。ヤコブはイサクとリベカの子であり、リベカの兄弟ラバンの甥です。つまりラバンはヤコブの母方オジなので

相続形態の変化。(赤丸が相続者)

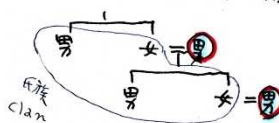
① 直接母系相続(母から娘へ)



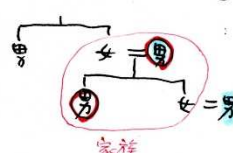
② 間接母系相続(母の兄弟から姉妹の息子へ)
女が権利は男の兄弟に移された



③ 間接母系相続(義理の父から義理の息子へ)
母の権利はその夫に移された



④ 父系相続(女から息子へ)



す。一種の近親婚にも見えるけれども、そういうのは聖書の中を見るとあるんだよね。そうするとラバンさんって、強いよね。ラバンさんはある意味で「氏族 pater」であり、その後の父、「家族 pater」と戦うような存在なわけです。そのようなことを考えると、また聖書の読み方も少し変わるかと思います。

前半の最後に、勝手な予告をさせて戴きます。私は、ただいまナイアガラ滝を表紙カバーにして【石塚正英ナイアガラ叢書三部作】を刊行している最中です。その「ナイアガラ」の意味をお話しします。叢書は以下の3点です。

- (1) 学問の使命と知の行動圏域、社会評論社、2019.11.
- (2) フォイエールバッハの社会哲学—他我論を基軸に、社会評論社、2020.01.
- (3) 価値転倒の社会哲学—ド・ブロスを基点に、社会評論社、2020.03.

次に、叢書名の「ナイアガラ」について説明します。アメリカ先住民の一つであるイロクォイ人はナイアガラ川の両岸流域に居住して部族連合を形成していましたが、米英戦争（1812-15）でアメリカとイギリス・カナダがナイアガラ川を境に激しく戦い、多くの先住民が犠牲となり、居住地区は両勢力によって分断されました。私



の社会哲学・社会思想史研究は、いまや、このイロクォイ人社会とその歴史に学問的な端緒を見出すに至っています。2014年には観光船でシカゴ川からミシガン湖にいで、ナイアガラの滝近くに観光船で接近し、イロクォイ社会の息吹を肌で感じ、短編「母方オジ権と歓待の儀礼——ハイダ人社会とイロクォイ人社会」（世界史研究論叢、第5号、2015.10.）を発表してもいます。

これで前半を終了いたします。少し休憩させて戴きたいと思います。

Ⅲ. 学問するマガジンエディター

- (1) 「社会思想史の窓」「クリティーク」ほか

では、後半に入ります。前半では、学問論の構築とその現場について話したので、後半は私の学問するスタイルや方法の話が中心です。

立正大学大学院を満期退学した後、1982年4月、指導教授の村瀬先生の推薦で私は立

正大学文学部の非常勤講師に就任しました。そういう意味では 32 歳で大学の教壇に立ちました。しかし、しばらくして 5 年を限度に非常勤を退職するよう告げられました。その時の理由は、大学院を終わった若い後輩たちに非常勤講師職を譲るべきだということでした。それで、そういうことになったわけです。文学部の非常勤講師ができなくなったことについて、つらかったけれども、しかし、そう言われればそうだなと思いました。でも、しばらくは教養部で講義し、けっきょく私は 50 歳になるまで、専修大学や明治大学で非常勤講師を続けておりました。その間、「常勤職に就きたいがなかなかない。つらい、どうしたらいいだろう」などとは思っていませんでした。それは有力な選択肢の一つであるし、生活はまちがいなく安定するだろうけれども、私の場合は職業としてでなく使命としての学問が肝心なので、安定を求めるあまり思うような研究のできない就職はつらいのです。

経済的には、30 歳代後半に河合塾という予備校に勤め小論文講師となりました。結構いい収入になりました。それで河合塾に 10 年以上いたのですが、研究はどうしたのかというと、自分で「社会思想史の窓刊行会」を設立し、ミニコミ冊子を編集し発行したのです。4 の倍数になるページで月刊『社会思想史の窓』という冊子を作って封筒に入れて。その当時はコピーがいまのように便利で安価な時代ではありませんでした。当然全部自腹ですが、最初は 20 人くらいに郵送したら、同じ世代の大学院生がどんどん読んでくださって、1 年の間に購読者数が 100 人以上になりました。その購読者の一人が、やがて私を東京電機大学の教壇へと導いてくれることとなるのです。

さて、ミニコミとはいえ、これは研究手段になる、と思いました。『社会思想史の窓』を読んでもくださる人たちの間で交流をしていくことも目的にして、十九世紀古典読書会という研究会を作りました。古典読書というと枕草子とか源氏物語を読むような雰囲気がありますが、そうではなく、サン・シモンとかヘーゲル左派など、19 世紀ヨーロッパの学術書、思想書を読むということで、交流を拡大していきました。とにかく研究の場を作ることだとの思いからこのミニコミを 2009 年の 158 号まで継続しました。

立正大学の大学院に進みつつ、指導教授の村瀬先生は私の研究テーマを考慮して、私を明治大学大学院の大井正先生に預け、大井ゼミで 3 年間聴講するのですが、行くところ行くところ、出逢った方々に『社会思想史の窓』の読者になってもらった。読者になってもらえれば、ライターになってもらえる。そういうふうにしてやっていきました。どちらかと言うと、マガジンエディターなわけで、この第 3 部は学問するマガジンエディターとい

う括りです。

『社会思想史の窓』編集中の 1980 年代なかごろ、青弓社という版元の『クリティーク』という商業誌に関わりました。大阪の保井温（やすいゆたか）さんほか複数の編集委員でもって、言論界・読書界にクリティークつまり批判運動を巻き起こそうと企図したわけです。「マルクス主義の現在」（創刊号）、「現代思想家群像」（創刊 2 号）などを特集テーマに掲げま



すが、私には私なりの使命がありました。委員の一人、鷺田小彌太さんから「石塚さん、この雑誌の編集委員になってください」と頼まれたので、私は「アフリカをやります。アミルカル・カブラルという人物。その方面の企画エディターとして招いてくれるのであればやります」と言いました。そしてただちに、創刊号に「アミルカル・カブラルのデクラッセ論とギニア・ビサウの現実」を掲載しました。

とにかく、しばらくはカブラルで突っ走ろうと思い、ほどなく「アフリカの文化と革命—カブラル」（創刊 3 号）を編集したのです。カブラル研究の先達だった白石顕二さんと組んで誌面づくりを行いました。そこにはカブラル翻訳をメインに、私自身の論考「アミルカル・カブラルのプチ・ブルジョワ論とアフリカ文化」を掲載しました。数は少ないけれども初めて知ったという読者から感想を戴き、やり甲斐がありました。この時に関係があった白石顕二さんのアフリカコレクションが多摩美術大学に所蔵されていることでもあり、ついこの間、7月 27 日に多摩美術大学の美術館で、私はカブラル講演をしました。

さて、現代思想をかじっている人にアフリカ革命について質問しますと、フランツ・ファノンの名をあげます。アルジェリア革命というかアルジェリア独立運動の時に、精神科医のファノンはルポルタージュを書いて、作品を次々に出版していきました。でも、ファノン自身は指導的革命家ではない。アルジェリア民族解放戦線に従軍するけれども、どちらかといえばポライターです。しかし、カブラルは、地下に潜行して以来、ポルトガルから命を狙われる戦闘指導者としてやっている。私はこれは決定的に違うなと思います。

ファノンのほかもう一人、カブラルとダブるのは、キューバやボリビアでゲリラを指導し命を絶たれたエルネスト・チェ・ゲバラです。ゲバラは 1965 年ころコナクリでカブラ

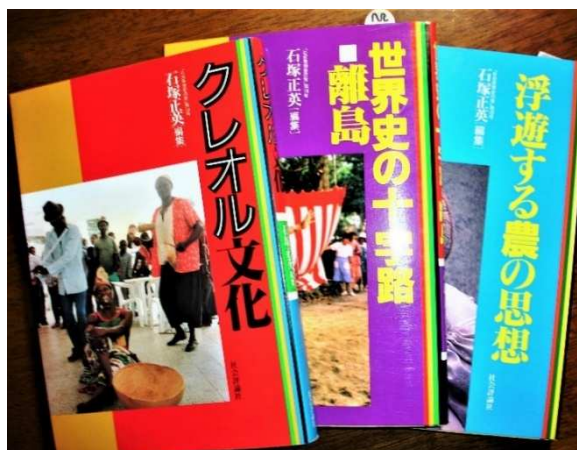
ルと会談しています。ゲバラが暗殺されると、カブラルは「チェは死なない作戦」を展開してポルトガル植民地軍を攻撃したそうです。ですから、カブラルとゲバラは相性が合ったと思います。

この3人、ことにゲバラとカブラルに共通するのは、何か構築したものに愛着するよりも、構築する過程にすごい情熱を燃やしたということ。カブラルよりも、それはゲバラのほうが典型でしょう。キューバ革命を成し遂げると、別のところボリビアに行って暗殺されるまで革命に奔走するわけです。ボリビア転戦に先立ち、彼はキューバ国家の大臣として日本に来ました。しかし、そういうフォース的なものを彼は本能的に嫌うんです。キューバという国をつくってキューバという国を安定化させることはカストロに任せればいいんです。そうではなくて、ゲバラは、まだ戦乱の渦中にある、これから革命運動を構築していかなければいけないところに身を投じていくんです。この態度のゲバラとカブラルは私にとっては強烈だったので、その運動を『クリティーク』で紹介できるようになって、ものすごくうれしかった。

ところで、最初に紹介しました『社会思想史の窓』を、90年代に入って、私はいまここに参加していらっしゃる社会評論社の松田社長にお願いしてバージョン・チェンジしました。magazine と book のくっついたような名前の mook (ムック) を作りました。本のようで雑誌のようで、本当は本であって雑誌ではない。118号から123号まで、全部で6冊刊行したんです。

118号は『クレオール文化』。クレオールは中南米のクレオールにあやかりました。15世紀末スペインがもたらしたヨーロッパ文化と先住民文化との混淆です。アフリカから奴隷として連れてこられた人たちがもたらした文化とも混ざり合う。そうした混淆言語はクレオール語。私はこれをポジティブに評価したいんです。欧米人はネガティブに扱うんです。20世紀初頭、ジャマイカあたりで流行りだしたレゲエ、あれはサブカルチャーにすぎない、といった具合。でも、アフリカ文化に由来するジャズとかを見ても分かるように、サブカルチャーはやがてスターダムにのし上がっていくわけです。文明から疎んじられていた辺境文化が、実は私たちの生活にも染み入っているんだという側面を炙り出したのが『クレオール文化』です。音楽から料理、医療、建築、文学ほか、クレ奥ルのいろいろなヴァリエーションを座談会の形で入れ込んであります。

119号は『世界史の十字路・離島』です。離島というのは、世界史的な使命というか、世界史的な出来事で満ち満ちている。言葉もクレオールで面白い。特集『クレオール文化』とこの『離島』は、ある意味で姉妹編のようなものです。120号『浮遊する農の思想』も追い込められる産業を扱うという意味で、サブカルなイメージを持ちます。宮城県の農村に行って、農業従事者にインタビューをしました。私はこの日のうちに仙台から新幹線で埼玉へらなければいけなかったのですが、ものすごく酔っ払って、その時にいろいろなことを学びました。



「このお吸い物はうまいですね。これはうまいな」って言ったら、「これは田の草取りで働いてくれた合鴨の肉だよ」との返事でした。春に田植えをすると合鴨のヒナを放して、その合鴨が雑草とか食べてくれます。そして実りの秋、十分大きくなると人間がつぶして食べちゃうわけです。「生きとし生きた命を戴く。それが農業だ、農民だよ」と教えられた。その時に、農業は浮遊しているけれど、生きる現場での浮遊であって、糸の切れた凧ではない、あるいは新たな農業に向かって羽ばたく、そういう形で浮遊についてもう一つ別の読みをしていくことが大事なのではないかと思ったわけです。

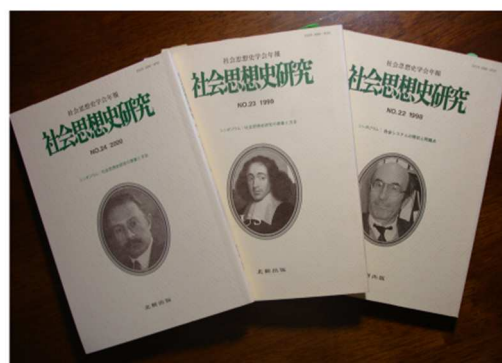
『社会思想史の窓』は、その後、私もインターネットというのをやるようになったので、社会評論社から刊行するのを止めて、誰かれ構わず覗いてくれるよう WEB マガジンにしました。紙媒体でないのでレイアウトは違いますが、158号まで続けて2009年に終わりました。

それから90年代にもう一つ忘れられない、しかも、私の研究に深く根ざしている雑誌と関係しました。『月刊フォーラム』です。これは Forum90's という運動体が編集する雑誌です。これは毎月刊行されますが、発売元の社会評論社で出版していたのです。これは私にとって、何よりも現代社会、現代思想を探究するのに役立ちました。ここにわずか3冊ですが紹介しましょう。まずは「地域は国家を包囲できるか」です。通常は国家が地域

を包摂してくるわけですから、逆転した発想です。ほかに「インターネットは武器たりうるか」と「スポーツ〔動員〕という政治イベント」。こちらは1940年頃の東京オリンピックをテーマにしています。物事をはっきり示すマイナーな運動体なんだけれども、その少数派が議論を世間に撒き散らせるかというようなことをやったわけです。私にとって忘れられません。



次は学会誌『社会思想史研究』です。私は、1990年代は河合塾にいましたが、社会思想史学会という全国学会の常任幹事をやっており、年報の『社会思想史研究』を6年にわたって編集しました。これはアカデミックだから査読もあるし、大学院生がアカデミックポストを得る業績になるといった意味もありました。



年に一度のシンポジウムをやって、その報告記事をトップにおき、討論の経過を載せていく雑誌なので面白かったです。けれども、2011年以後、しばらくして退会しました。その理由は、3.11の東日本大震災があったことです。「この間の大震災以降、私は学会の席でなく、研究のフィールドを歩きたいと思います。なので、退会します」といった退会届を送りました。心の持ちどころとして、デスクワークの前にフィールドワークだなと。

ただ、インターネットの力には期待を寄せました。そこに飛び込んできたのが「ちきゅう座」というネットマガジンというか、WEBサイトです。私に参加を促した人は社会評論社の社長で、そこにいらっしゃる松田さんです。そこで、私は編集委員会に入りました。日本国内外のいろいろなトピックスをマスコミより早くアップする。左右いろんな傾向の記事をそれなりに拾い集めていく。私はいまは組織を退いています、サイト自身は昨日も覗きましたが、意味のある論説がたくさん載っています。大成功していると思います。これは私にとって忘れられないものです。

もう一つのWEBマガジン「プロメテウス」を紹介します。これは私の身近な研究仲間でありますやすいゆたかさんに誘われました。やすいさんに「石塚さんは『クリティーク』のときの共同編集人でもあるから、あなたと私のよしみだから、共同編集をやってくれ」

と言われてなったんですが、記事といえば、ほとんどやすいさん中心になっていきました。それでいいんですけども。いまはやすいさんの個人 WEB になってます。それはそれでいいよね。2人が交互に書いても良かったんだけど、そうはなりませんでした。

もう一つ、本当はあまり気が進まないんですが、昨年に加わった日本科学者学会というところから発行されている『日本の科学者』というマンスリーの編集人を今年の夏からやっています。これは編集人が20人ぐらいいて、2年任期で最長4年までやれるんだけど、そんなにはやりたくないですね。

(2) モバイル・エディター

ここから、いくつかの経験をもとに、私なりのエディター論を展開します。私はモバイル・エディターです。社会評論社とか青弓社とか、そういうところの社員として編集しているわけではありません。こういう雑誌を編集しませんかと言われて「はい」と言ったのが、青弓社の『クリティーク』です。私が編集している雑誌を出版してくれませんか頼んだのは社会評論社です。私がいろいろ経験したものを区分すると、4つに分かれると考えました。

1つ目、資金と販路を持っている出版社が、編集スタッフとタイアップする雑誌、これが『クリティーク』です。これは青弓社のものです。2つ目、編集スタッフが出版社とタイアップする雑誌。これは、石塚が社会評論社とタイアップして作った『社会思想史の窓』。3つ目、フォーラム90'sという運動体があって、90'sは1990年代という意味ですが、これが社会評論社という出版社とタイアップしたのが月刊『フォーラム』です。それから、4つ目が、企業としての出版社とか商業雑誌ではなくて、学会が主体となり出版社とタイアップして作る雑誌『社会思想史研究』。最初の出版社は北樹出版で、のちに藤原書店にかわります。私はそのかわりに降りていますので、藤原書店には馴染みがほとんどないです。この4つのほかに雑誌を出すとすればどうなるか。

5つ目、ネットマガジンです。出版社がWEB上で広告的に立てるネットマガジン。これは出版各社がよくやっています。本当は自社の出版物を売りたいんです。それから6つ目、WEB上の運動体が自己資金でやっていて、それが編集スタッフとタイアップするネットマガジン。発足時の「ちきゅう座」です。ちきゅう座は最初始まった頃は、有志的な、ボランティア的な人たちが自腹で資金を作っておいて、自己資金を用意してWEB上に載せて始めたんです。WEB上の運動体という意味ではそうですし、「ちきゅう座」はいちお

う社会評論社に事務所を構えています、そこが編集局というわけではないです。

7つ目、WEB上の運動体がWEB上で個人サポーターとタイアップするネットマガジン。発展途上の「ちきゅう座」ですね。「ちきゅう座」はなぜ優れているかと言うと、いま現在、少なくとも自力で、パトロンを得るわけではなくやっけてきているから。しかも、up-to-dateな時事問題を、いまいろいろなところで動いている人、書いている人たちにダイレクトに寄稿してもらっているの面白いと思います。

さて、ここで私の革命的ネットマガジンの7原則を披露しましょう。ブランキ的、秘密結社的です。最も確かな、経験に富み、鍛錬されたネットマガジン編集者たちから成る、緊密に結束した少数者の運営委員会を形成する。いわば秘密結社です。誰にも知られない、確固たる、継承性をもった編集者の組織がないなら、どんなネットマガジンも恒久的とはならない。コアになる者たちは、緊密に連携して、きちんと議論をする。民主主義的な議論では、なるものならないことが多い。多数決では進まない。したがって、コアになるものは徹底的に議論をして、その中は完全民主主義で、5人がいたら5人が完全に一致するまで討論し尽くすが、それは結束した運営委員会において行う。そういうものがなければ長続きしません。

主要な諸地区にサポーター、特派員や提携者を持ち、できるだけネット空間だけに閉ざされない多くの組織、運動体と連携する。札幌とか鹿児島とか、いろいろなところに特派員を用意するわけです。あるいは、提携者、共感してくれる人を用意します。先程私は、東北の農民と座談会、討論会をやったと言いましたが、そういう農村の人たちに加わってもらったりするわけです。この人たちは、陰謀の中にはいません。明るいいところにいます。そういう人たちと連携することで、初めて公開できるような記事、あるいは、マガジンになっていくわけです。

次は、これと運動で共振する紙媒体出版社に、サポーターになってもらって連携する。ネット上だけでは、ダメです。ネット上だけでももちろん議論は進みますが、それを歴史的に記録しておく必要があります。ネット上ではシャットダウンしたら全部消えてしまいます。その点で、国会図書館などに確実にそれが蓄積していけばいいわけですから、そういう意味で、紙媒体出版社と連携して、各地の図書館に蓄積していくような形をとる。その代わりに、共振してくれた出版社には、いくつかネットマガジンでの広告という形で連携していく。

交換広告を載せあうことで、互いにギブ&テイクの関係構築する。お金は介在しない

が利益は交換できるということです。ネットマガジンは、共振してくれた出版社に対して、書評・新刊紹介という形でも営業活動を支援する。たとえば、社会評論社で新刊が出たら、それをネットマガジンで紹介を掲載するわけです。Amazon のブックレビューには勝てないかもしれませんが、連携を拡大してやっつけば GAF A に対抗してカウンターレビューを発信できるようになるかもしれません。むろん、連携する出版社は電子書籍も扱うこととしたいですね。

コアになる運営委員会、共振してくれる出版社、各地にいるサポーターとの間でネットマガジン電子マネーを発行し、ネット経済＝アソシエーションを構築する。売買の WEB 市場圏を作るわけです。現金は使いませんが、電子マネーで交換する。この団体に入った人たちは電子マネーは支払うけれども、現実の千円札とか一万円札でもって買わなくていい。電子マネーは地域通貨のような形で作っていき、サポーターというのはある意味読者でありますから、出版社とマガジンの運営委員会と、サポーターの間で、経済が成り立つ。サポーターが増えれば増えるほど、三者が連携していける。そういうネット経済圏のアソシエーションということを、私はだいぶ前に提案しましたが、こんな提案は現実の中でもみ消されてしまったというか、誰にも聞いてもらえなかったというのは事実です。

ますます私の観念が肥大化しておりますが、そうしていくとモノとかユニとかの一元主義を越えて、ポリとかマルチとかいうふうにしていかなければいけない。そうすると、私は大学の研究者ですとか、私は雑誌の編集者ですとか、そういう単一の属性でなく複数連携させて、かつそれが全部自分のやりたいこととして収斂されていく。私は 50 歳までこのマルチ生活をやってきましたが、そのお陰で得たものは得られなかったものよりはるかに多いです。

だいたい 50 歳くらいまでモノクロニックに生きてきた研究者は、そろそろマンネリ感情を抱くか、さもなくルーチンに慣れっこになり、惰性の人生を余儀なくされます。あるいは反対に、自分の将来はこれしかないと思っている人が、その実現が困難とわかると、人格否定されたと思うのか、脱力してしまうのか、研究の場から去ってってしまう人がいます。しかし、マルチ的に研究テーマと収入源を得ている者はそういうふうに思わないですね。私は来年の 3 月で東京電機大学を退職しますが、それで自分の研究生生活が終わるとはさらさら思わない。職業、ジョブとしての現場は去りますが、もともとそれを求めていたわけではない。私の学問は「百学連環」です。その意味するところは、研究領域の連環であるとともに、研究現場の連環でもあるわけです。

IV. 学問するフィールドワーカー

私は机上で研究することは嫌いではありませんが、しばしば野外にでて研究してきました。フィールドワークです。去年、私は転倒して頭蓋骨と脳の間を出血してしまいました。硬膜下血腫というのです。それ以来フィールド調査にはでかけていないのですが、来年の2月には濟州島に行きます。前々から「海女」や「巫女」の文化誌・民俗誌に関心があったのですが、いよいよ現場に立つことができそうで、まずは机上で資料を読み準備中です。日本の習俗にもおおいに関係しています。ワクワクしています。

そういうわけで、来年はまたフィールドワークを復活させますが、平成年間に150回はフィールドワークをしています。たくさんの人と行くときもあるし、1人で行くときもありますが、それをざっと見ると4つか5つに区分できます。

(1) 石仏虐待儀礼調査

まず第一、石仏虐待儀礼調査。これは、神様をぶん投げていじめる、新潟県上越地方で江戸時代からある。もっと前から行われていたかもしれません。長い間雨が降らないで農民が困ると、お地蔵さんに拝む。拝んでも拝んでも雨が降らないと、ついに祠に置かれてあるお地蔵さんをため池の端に持ってきて、縄で縛ってボーンってぶん投げるんです。「雨を降らさないと上げてあげないぞ、いつまでもそうしてろ」とか怒鳴るんです。虐待してるわけ。こうした神仏虐待儀礼をフェティシズムと称します。

私は新潟の上越市で生まれていますから、郷土のこの奇祭をことのほか気に入りまして、何度もフィールドに出かけています。普段はご利益を願って、祠で賑々しく拝む。なかなかご利益が叶えられないと、これを荒縄で縛ってため池にぶん投げて虐待する。平成6年だったか、干ばつだったので虐待儀礼



が実施されました。その時私は、随行する老婆にこう質問しました。「おばあちゃん、レブリカって言うんだけど、これと同じ形のお地蔵さんを石で作って放り投げ、その割れている古いお地蔵さんを引退させてあげたらどうですか」と言いましたが、「何言ってるんだ。ダメだ、ダメだ。このお地蔵さんじゃなきゃ、雨降らせてくれない」と言って叱られました。

た。こういう本物虐待をフェティシズムと言います。代理では効き目がない、ご利益が得られないんです。

平成 14 年にもやりました。祠にいる赤いちゃんちゃんこを着たお地蔵さんを池に連れてきて、おじいさんがボーンとぶん投げています。このとき実は、この石仏が上越市の文化財になって、それを記念するためにやったので、本当は降らせる必要がないわけ。その証拠に、みんな雨傘さしてるでしょう（笑）。雨が降っているんだけど、記念にやる日を決めてしまったから。石仏をボーンと投げて、何度ももて遊んでいました。やがて儀礼が終わったら、なんとパーッと晴れたんです。反対の効果も見込める？どっちにせよご利益あるんだなあ（笑）。



もともと頸城野はフェティシズムの里です。荒っぽい。お地蔵さんをいじめたりする。そういったことがあるので、いくつかそういうものの名残があります。たとえば、秋に台風が来ると、風は嫌ですからこれを撃退します。しかし、春先に稲が受粉する頃、稲は風媒花ですから風が媒介しておしべとめしべが受粉する。ですから、風が絶対必要です。風が農民にとって大切なんですが、吹きすぎると嫌です。その両面性を体現して拝まれた自然神、それが風の三郎です。

風の三郎は忌まわしい。こいつが来ると嫌なんです。風の三郎がやってくるとごまかすんです。「いやあ、三郎さんいらっしゃい」。田舎の村のはずれに東屋とかボロな掘っ立て小屋を作っておくんです。「さあ、どうぞ壊してやってください」。風が吹くとそれが倒れるんです。「暴れることができてよかったでしょ、満足できたでしょう。さあ、帰ってください」、「もういいでしょ、帰ってください、楽しんだでしょう」。風の三郎には来てほしくない。しかし、風には来てもらわないと困るんです。そういう転倒の精神をフェティシズムと言います。価値が転倒している。そういうものを新潟県上越市周辺の農村では、この間までやっていた。

ところが、奈良、京都の風の神は逆です。びっくりものです。奈良、京都の風の神は、風の三郎をやっつけるほうでしたから。暴風を退治してしまうのが風の神様なんです。とにかく暴風を、人間の為にならない風を鎮圧してくれるのが、風の神様になっているところがおかしいですね。畏怖するという言葉の意味は、怖れかつ敬う、ということです。風

の神は畏怖の対象であって、怖れの対象である三郎をやっつける京都・奈良の風神は風の神には置けませんね（笑）。

（2） マルタ島巨石神殿調査

私は本当は、まっさきに地中海で調査をしたかったのですが、そういう意味ではお金はありませんでした。しかし、50歳を過ぎて、東京電機大学の専任教員になったら、研究費から旅費を支出していいことになったんです。それで、2000年と翌年に2回ほど夏休みを利用してマルタ島に行って来ました。

ここに行くと、先ほど皆さんにお話ししたバッハオーフェンの母権とか母方オジ権に係る巨石遺跡があるんです。お母さんのことを英語でマザーmotherと言いますが、ラテン語ではマターmaterです。物質という意味のマテリア materiaも同系統の言葉です。そこからマテリアリズム materialism（唯物論）という言葉も生まれています。materialistと言うと、現在では唯物論者と訳しますが、日本でも江戸時代は「材木商人」と訳しています。材料（material）を商っているから。そういうことを合わせて研究しながらやりながら、母権とか、母権社会を調査したかったわけです。

これはマルタの巨石神殿ですが、遺跡の看板に Ġgantija Temples と書かれています。Ġgantija はマルタ語ですが、英語で言うと Giant（巨人）です。それはともかく、この神殿はお母さんの格好をしています。今から約5000年ほど以前、マルタでは母が非常に大切にされていたわけですね。



マルタ島や隣のゴゾ島では、住宅の玄関に Mater Dei（聖母）というプレートが張り付けてあります。マルタ島の住民はキリスト教というよりもマリアを信仰しています。これは母権を調査する私にとって、非常に魅力的です。

（3） 日韓古代文化交流調査

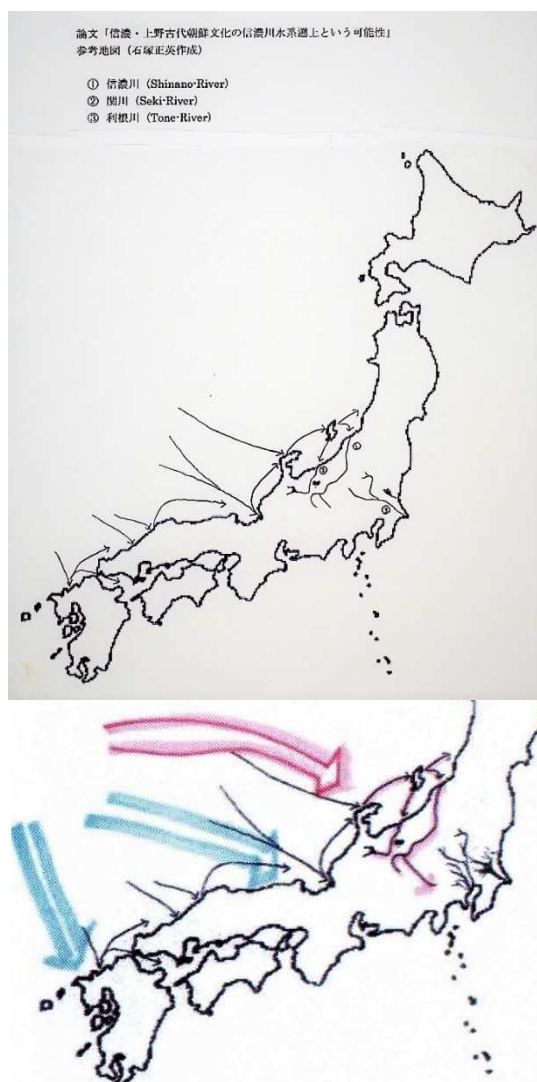
ここからは、この5～6年夢中になっている韓国の話です。私は5月29日に、NHK番組「歴史秘話ヒストリア」をみて、びっくりしました。じつにおかしなことを解説するもんだ、と思いました。みなさん、前方後円墳という大きな古墳があるのは、もちろんご存

知ですよ。どうしてあんなったかと言うと、古代の朝鮮から軍隊が海上を渡ってきた時に、浜辺まで来ると、見たこともない巨大な建造物が目に飛び込んできて、威圧されてしまう。なるべく日本海側に多く作って敵軍を怯ませるために造ったんだと。それから、沿岸各地の豪族たちは、あれと同じ形の墳墓を造ることで、ヤマト朝廷と君臣の契りを交わす。そのような意図からヤマト朝廷に服従した人たちはみな同じものを造るようになった、という説明があったんです。

その説明の根本にあるのは、朝鮮から来る人を敵だと解釈している点です。高句麗（コクリョ）とか、新羅（シルラ）、百済（ペクチェ）。ことに高句麗から来る人を敵とみなす解説です。目も当てられない観念です。いまヘイトだ何だと言って、日韓関係が冷え切っていると報道していますが、平気でそういうふうにも思いたくなるような解説ですので、私は何か違うのではないかと考えております。

次の地図を見てください。国家と国家ではなく、民衆と民衆の間の交流は確実にありました。国家と国家だから攻めてくるという考えになりますが、民衆は朝鮮半島沿岸各地から船を漕いで、能登とか佐渡とかにやってきます。地図にある赤いラインは、私がある意味、自分の調査結果として書いていますが、この赤いラインは国家が成立するよりも以前からあります。

少し話は変わりますが、昨今、北朝鮮の船が難破すると、このように新潟から秋田とか北海道沿岸に漂着します。ですから、漂流すれば玄界灘のほうには行きません。海流で能登とか佐渡とか秋田のほうに行きます。そういう形で海流任せで日本列島に渡来した人たちは戦争しに来たわけではありません。私は、まずソウルの国立博物館とかにある地図を写真に撮ってきて、それに赤いラインを描きました。皆さん、これから 10 年後、この



赤いラインはソウルの博物館の地図にも付きます、きっとね（笑）。

信濃川沿いに証拠が点在します。信濃川を上っていくと、信越県境に高句麗の人たちの墓が累々とあります。彼らはそのあたりに生活圏を見つけ代々居住し、老いて亡くなった。彼らの墳墓を積み石塚と言います。信濃川、千曲川の川原石をいっぱい拾ってきて積んで造る。彼らが固有の墳墓を造営しここに葬られたということは、皆さん、高句麗の人たちはここに長く生活しているからでしょう。ここに生活圏があるからでしょう。ですから、高句麗の人たちが軍事的に攻めてきたというわけではありません。

この様式の墳墓は沿岸のいろいろなところがありますが、一番奥まったところでは高崎にあります。高崎市保渡田古墳群の周辺には下芝谷ツ古墳という、高句麗に起源を有すると推測できる方形積石塚が遺っているのです。つまりそこまで、高句麗の人たちが行って、生活をしてきたということです。生活道具が発見されたのみであれば分かりません。あちらから動いてきた、こちらから動いてきた、そこに住んでいたかどうか分かりません。ですが、お墓という動かぬ証拠があります。そういう意味で、私はこの自説は大きく展開するのではないかというふうに思います。

そういうふうに見ていくと、民間ルートでは早くから日韓の交流があった。しかも、それが旅人としてやってきたのではなくて居住して、何代も日本でその人たちは暮らしているということです。そういった点から見て、これは歴史を見る価値の転倒というふうなことです。仏教が伝わったのは538年だとか、国家的な年号で歴史を刻んでいく、そんな官許声明だけでは見えてきません。はっきりは言えませんが、それ以前からこういう物的な証拠を残して渡来人は日本海沿岸各地に生活していたんだというのが、私の転倒の議論の第一です。

古代史の見方をそういうふうに転倒させるのは、ただ古代史の通説に異論を唱えるというのではなくて、いまのありよう、日韓関係がぶち壊されるような動き、これをしっかり吟味したいからなのです。私は韓国内を旅して何度も経験していますが、人びとはものすごく温かいです。私たちのことを日本人と分かろうが、分かるまいが、いずれにしてもすごく温かく迎えてくれています。

私はある時、自分の研究心をさらに奮い立たせる資料に出逢いました。それは明治、大正時代までに、アジア一帯でフィールド調査に奔走した鳥居龍蔵という人類学者の著作です。彼は気の毒と言えば気の毒です。日本が日露戦争で領土を取って、南満州鉄道株式会社をつくった。そして1931年以後日中戦争に入っていく。そういう侵略の歴史が一方に

あるわけです。しかし、その領土侵略がないと彼は満州、モンゴルを自由に歩けないわけです。

この写真にあります書籍は、朝日新聞社から出ている彼の全集なのですが、これを読むと、間接的な侵略の記録だと思えなくもないです。ただ諸刃の剣と言います。一方では人類学のためになっていますが、もう一方では、日本が占領していたからできたのだらうと。

鳥居龍蔵 (1870~1953) と先史巨石文化 —鳥居さんのドルメン！—



埼玉石仏の会 (日本石仏協会埼玉支部)
平成29年6月11日
ウェスタ川越

韓国もそうで、韓国にいま私が旅行に行くと、いろいろな石造物がありますが、1910年に日本が韓国を併合した時にはもっとたくさんありました。例えば慶州の仏国寺にいま行くと獅子像は1個しかありませんが、併合当時には、少なくとも2個はありました。日本の調査団が全部写真を撮ったので、その違いが分かるのです。韓国の石造物の写真を概ねきっちり撮ったようです。それは戦後に復刻されて、私が話した上越市の図書館に全巻置いてあります。それを見ると韓国の石造物に関する情報がいろいろ分かります。実測までしています。そうした資料報告書は、占領していなければ今日に残らなかったでしょう。

ですから、鳥居さんはそういうことになる前、倫理とか人権とか、そういう観念がまだ確立する前に調べたので、ある意味赤裸々に出てくる部分もあります。徳島にある鳥居龍蔵記念館に連絡し、龍蔵の息子さん、龍次郎さんに挨拶し、お父さんの業績を私なりにフィールドワークの中に使っていただきますのでよろしく、とお願いしましたが、その時、龍蔵の文献をあくまでも学術的な目的をもって利用する、と申し上げました。その結果、どうぞ使ってください、となりました。龍次郎さんは先年に亡くなりました。

そういう調査結果をみんなまとめて、私は一昨年、著作『地域文化の沃土 頸城野往還』を社会評論社から出版しました。韓国と日本の間の文化交流、主に古代を中心に。それによって培われた、いわゆる裏日本と言われる日本海側の文化をクローズアップしてみたのです。日本海側の一地域が文化的に豊かな沃土、肥沃な土地ということです。頸城野を軸にして、いろいろな地域が往還しあっているのです。その一つが朝鮮半島なわけです。

ところで、先ほど説明しました高崎市には裸の古墳があります。土盛りしただけなんです。何年かたって草が生えていますが、裸の墳丘に埴輪を立てています。ですから、造った当時のものを見学できますが、墳丘の周りにこっちを向いて、外側を向いてこの埴輪がいます。これを見て私はびっくりしました。これはレプリカですが、本物は博物館の中にありました。

皆さん、三角の模様が見えますでしょう。三角は結界と言って、あちらが神様の領域、聖なる場所、こちらが人間の領域、俗なる場所という際を結界と言います。この埴輪はずっと並んで結界を造っているんです。問題は三角です。この三角模様は、結界を意味する石仏、石造物、古墳の石棺の中にもよく現れます。

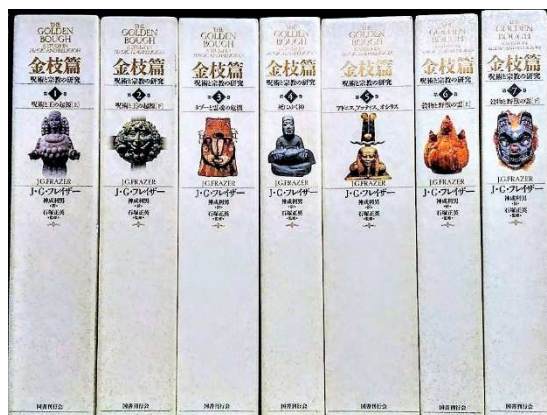
三角という形象にはいろいろな説があります。一つは蛇の鱗と言われています。蛇と言うと、神社にある鳥居にかかっている注連縄しめなわ、相互にぎゅっと巻いたような形象は蛇です。蛇を藁で模して作っているんです。鳥居の向こうは神の世界で、鳥居のこちらが俗の世界で、撚よって蛇が2匹絡まっているんです。ですから、蛇が結界を表します。「注連縄」という字は難しいですが、古くからの思想を体現しています。三角模様は日本だけではなく、中国にもあります。アジア共通の三角形です。知らない人は、仏教に関連して、蓮の花弁の形象、連弁を彫るのが下手なもんだから、三角になったんだという人もいますが、仏教が入ってくる以前の古墳の話ですから、蓮の花が三角に変化したのではないです。こういうことを考えると、高崎の古墳群には価値をひっくり返させるようなものがいっぱいあるな、と思いました。



(4) フレイザー【金枝篇】中のフィールド

そういうことがたくさん書いてある資料として、フィールドワークをしなくても読める本に、ジェームズ・フレイザーの『金枝篇』があります。フレイザーはイギリスの19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて生きた人で、人類学者です。

フレイザーは、儀礼で王がよく殺されるのはなぜか、なぜ最高権力者の王が殺されるのかに疑問を持ち、それでイタリアの神話的な風習を元にして、世界各地のそういう王殺しとか、あるとき転倒するような民俗文化をいっぱい拾って本に編集したんです。それが”The Golden Bough”で、日本では『金枝篇』と訳されています。これをいま私が全巻の翻訳監修をしている最中です。



フレイザーはバーネット・タイラーと人類学者の教え子にあたる人ですが、タイラーは先史人類の行動と精神をアニミズムで説明しました。アニミズムによると、霊魂は浮遊します。霊魂のことをアニマと言います。アニマは浮遊します。したがって、その霊魂が別のところに浮遊したら、その受け皿はその霊魂と一心同体となり、抜け殻はどうでもようになってしまうわけです。浮遊に際して殺されてもかまわない。

でも、王までも殺さなくてもいいでしょう。王の中にある霊魂を、若い王様にこれから王様になる人に移せばいいのです。殺すというふうになると、ちょっと不思議。つまり、霊魂には肉体が深く関係しているのです。両者は切っても切り離せない。そうすると、アニミズムでなくフェティシズムに近くなります。そこでフレイザーは、どうもタイラーのアニミズムを面と向かっては否定しないけれども、アニミズムの事例よりも、フェティシズムの事例をどんどん集めていくことになったんです。

彼はフェティシズムという言葉はもちろん知っていますし、ド・ブロスの理論は知っていますが、あまり意識はしません。つまり、師匠のタイラーが言うアニミズムではなくて、ド・ブロスの言うフェティシズムの事例を集める、とは言っていません。ですが、私が読むとそれがけっこうフェティシズムの解説になっているんです。ですから、このフレイザー『金枝篇』を翻訳してかかろうと思ったわけです。これまで7巻まで出ています。いま8巻目のゲラが私の手元に届いています。来年の3月くらいには8巻が出て、いずれ全部で10巻揃いまして、索引の別巻を加え、全部で11巻になります。第1巻が出たのは2004年で、いま2019年ですから長丁場です。

詳しい説明は省きますが、フレイザーの理論は、共感呪術と言って、さらに二つに分かれます。類感呪術と感染呪術。共感というのはシンパシーの意味です。同じようなことを

すると、あるいは同じものを持っていると、目的が達成できるという仕儀です。たとえば、きょう福岡からここにいらしている瀧津さんを普段から憎たらしいと思っていたら、瀧津さんにそっくりの藁人形を作って壁にかけ、釘でコン、コン打って、死ね、死ねって呪詛していると10日ぐらいで死んでくれます(笑)。瀧津さんに似たような人形にしないと駄目です。うっかり、そこにいらっしゃる杉山さんの恰好にして、死ね、死ねと言ったら、杉山さんが死んでしまいます。似たようなことに関係するので類感と言います。

もう一つは接触、感染。触ると感染します。彼女が大好きだと、彼女が持っていたハンカチとかを自分が抱いていると、彼女に想いが通じる。つまり相手が感染する、相手に接触することになる。それをこの二つで、日本も含め、古今東西から膨大な量の事例を集めています。

フレイザーの話は長くなりすぎるからこのへんで飛ばしましょう。今から10年ほど前に上越市に建てた私の図書室について話したいと思います。ここにいま言ったフレイザー『金枝篇』とか、とにかく1960年代末から私が読んだり調べたりした図書、その関連図書、友人から贈られた図書、みんなここに置いてあります。いろいろな古文書とかも置いていますが、私の一番の宝はやはりこれです。読書ノート。私は、研究上で読んだ図書については、あらかじめノートを執ってきました。その中にはヴァイトリングやヘーゲル左派関係の翻訳とかもあります。どっさりこの図書室に入れてあります。学問とは何か、という問いに答えるに、いま振り返れば、学問の基礎はノートだ、と言えるかもしれません。「石塚さんにとって学問って何ですか」と問われれば、「私の田舎の図書室に来てください。これです。このノートです」と答えて、実物を見てもらえばいいかな。我ながら、けっこう綺麗な字で書いてあるんです。

私はノートを執らないと勉強が進みません。大学ノートがずっとあるのですが、今でも保存してあります。これを執らないと、体系的な研究にならない。それから、いろいろなところでコピーをとったものを系統的にファイルしています。今ノートやファイルは上越市のほうに移してあります。誤解しないでほしいのですが、そのための図書室を建て、そこに並べてあります。今でもこれをよく使います。自分で書いたものだけに、けっ



こう頭に入っている。

私は、18歳から昨日まで毎日日記つけています。1日として欠かせません。入院したり旅行したりして書けない日は、メモを取っておきます。家に帰ったら日記にそれを書き写します。日記は毎日つけていますが、この日記の活用については、きょうのこの講演の冒頭が、私の日記からの引用に発しています。『^{はたち}二〇歳の自己革命』は私の18歳の日記から始まっています。

(5) さまざまなエピソード

ついでに、エピソードとして、私の転倒の社会哲学に関係することをいくつか話します。まずは、秩父のオオカミ信仰から。この写真はセメント



用の石灰岩を採掘している武甲山です。削りに削られて、山の高さも低くなりましたし、山腹が平らになっているのは、トラックが行き来をして、ときどき発破をかけてぶち壊して運んでいるからです。そこの周りで農民たちは相変わらず5月の鯉のぼりをやっている。私はこの風景を眺めて思ったのです。いまから30年くらい前の1991年、秩父でオオカミ信仰の調査を行っていました。そのときに村人に聞いたら、オオカミの頭骨を持っている家があるというのです。井上さんというお宅ですが、そこに行ってこのオオカミ頭骨の写真を撮らせてもらいました。これは裏から撮っていますが、表から見ると墨が塗ってあって、「これはうちの神様だから。あなたたちは調査だから見せるけど、これはうちの神様だよ」と言うので、「オオカミ信仰だからね」と私が言ったら、「うちの神様だ」と言うんです。

昔はときどき貸してくれという人が来るから貸し出していたけれども、もどつてくると削られていたとのこと。骨を粉にして薬として飲んでしまう。滋養強壯剤。それで井上さんは、一計を案じて墨で塗った。そしたら削られたら分かる。皆さん分かるでしょ。私なら削ったあと、また黒く塗るよ。それで返すね(笑)。それから、先祖がオオカミを撃ち殺した村田銃だと言うのを見せてくださいました。でも、それは火縄銃でした。しかし、そう言っているのに、井上さんのお宅には宝物として伝わっているんだな、面白いなと思

いました。

オオカミは世界で撃退されてきたんです。でも、いなくなると神様になる。生きていると怖い。先ほどの蛇もそうですが、こういう転倒した発想は人間の心をよく表していて、秩父はいいところだなと思いました。

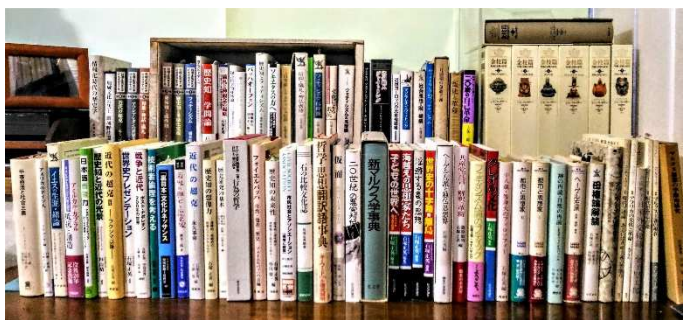
エピソードの二つ目。ここに参加して下さっている杉山さんに連れて行ってもらった伊東の佛現寺でのこと。日蓮宗のその寺に天狗が書いた詫び状と天狗のヒゲがあります。拝見した際、住職は「石塚先生は立正大学の先生だから、調べてください」と言うので、「調べましょう」と言って帰りました。これは漢字が伝わってくる前の日本の文字、神代文字によく似ていると思い、コピーを取って差し上げました。それから、ヒゲは調べれば膠(にかわ)かどうかすぐ分かりますが、そういう元も子もない話はしないで、そういう伝説が500年以上も伝わっているということについては、ご住職に手紙を書いて送りました。それがフィールドワーカーの心意気です。

エピソードの三つ目。これはさいたま市大宮区高鼻町の氷川神社で例年6月30日に、さいたま市緑区三室の女体山氷川神社で7月30日に行われる夏越しなごしの儀礼です。私の研究テーマにとっては生き生きとした地位転倒の儀礼です。この二か所の氷川神社は大きいです。大宮の氷川神社は立派な武蔵一宮です。儀礼に用いる茅の輪の中に真鍮かステンレスの芯が入っていて真ん丸です。そして、神橋のところに置いて参拝者をくぐらせます。

緑区の女体山氷川神社で儀礼に用いる輪はその辺に生えている葦草でできています。いわば雑草を集めて鳥居に縛っているだけで、丸くもなんともない。それで、どちらが古式かというと、女体山です。女体山では儀礼が終わると、輪をバラバラにして草を屋根に放り上げます。屋根は藁でできていますから、つまり生活の道具に使います。あるいは畑にまいて肥料になります。要は生活財として使っていきます。

ところが、大宮の氷川神社では、輪ひとがたに人形が付いていて、これにポンとさわって1月から6月までの穢れを取ります。女体山にも人形はあるけど輪に付いてはいない。神主が一つ持っていますが参拝者がポンと触るものではありません。大宮では全員に人形を配ります。各自が氏名・年齢を書きこんで神社に納める。そして、茅の輪とともにお焚き上げと言って、火で燃やして天に送ります。それに対して女体山では、明らかにこちらは最後まで地上にあるため、屋根に上げたり、畑にまいたりしました。この2例を比べると、儀礼の意義や価値が変わっていったことがよく分かります。女体山に見られる人間のための儀礼が、大宮氷川神社においては神信仰のための儀礼に代わっていったということです。

これは私がいままでに出版した本です。さいたま市の拙宅に並べて置いてあります。だいたい 100 冊くらいですが、これは一昨年に撮ったものなので、このあとまた 3~4 冊は出しています。



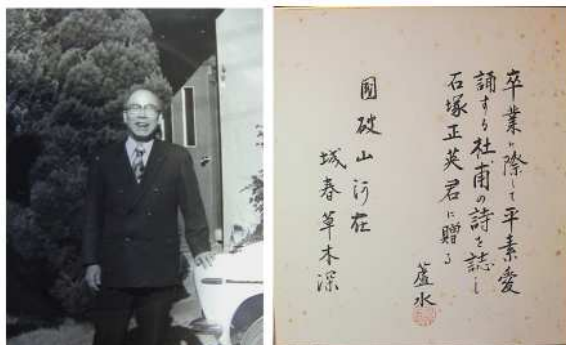
V. 恩師

最後にもう一つ、簡単に私の師匠を紹介します。私の師匠は 5 人います。みんな亡くなるまで研究から離れませんでした。

1 人目。私が立正大学に入学して、専門課程 3 年生になった頃、1970 年頃から知り合った酒井三郎。教育者です。ルソー、ヴォルテールの研究者で文化史の研究もしたけれども、それ以上に教育者です。卒業に際して、^{るすい}蘆水という雅号の印鑑がある色紙を戴きました。有名な「国破れて山河在り 城春にし 草木深し」を記してくださいました。そのうえで、「石塚くん大学院に来ませんか。君は研究熱心で、卒業研究について、君はドイツ語で研究しているし、ぜひ大学院に来てください」と言われました。

そのとき私は、東京の下町、山谷のドヤ街、その日雇い労働者を支援するビラを先生に渡しました。「私、ここでこういうことをしますから」と言ったら、酒井先生はニカッと笑って、「分かりました。頑張ってください」と。私は皮肉で言ったのではなく、学問とは何かを問う者に満足な対応のできないような大学で研究なんかできるものか、そう思ったんです。自分でやれることは自分でやれるかもしれない、だったら大学でやる必要はない。生活の中でやればいいと思った。けれども、それはたしかに私のほうが甘かったんです。酒井三郎は研究者たる私の行く末を指し示してくれたのだと、今にして思います。

1. 酒井三郎(1901-1982) 啓蒙期の文化史・ヴォルテール・ルソー



大学卒業の3年後、酒井先生の出題した入試問題を解いて、私は意を決して大学院に進みました。後で知りましたが、ドイツ語問題の素材はエルンスト・カッシーラの文章でした。先生は最晩年の1981年に論文集『啓蒙期の歴史学』を刊行されましたが、原稿にはドイツ語の引用が散見されました。先生は私にそれをすべて日本語に置き換えてほしいと依頼されました。とても光栄でした。

2人目。大学院での指導教授となった村瀬興雄先生のはからいで、私は大井正という明治大学の哲学・社会思想史の専門家と知り合います。この先生は、私が大学院でヘーゲル左派を研究するのに、ありえないほどの厚意を注いでくださいました。先生が1970年頃ドイツに1、2年滞在して持ち帰った資料を、「石塚くん、ほら使え」「石塚くん、好きなだけコピー取りなさい」と惜しげもなく渡してくださるんです。

先生は1986年夏に肺を煩って最初の入院生活をおくられるまで、当時明治大学で開かれていた社会思想史研究会の例会にレギュラー出席されていましたが、入院後は、もう大学まで出て来られることはなくなりました。それで、私はもはや先生に直接の教えを受ける機会がなくなってしまったの

2. 大井 正(1912-1989) シュトラウス・フョイエルバッハ・シュタイン



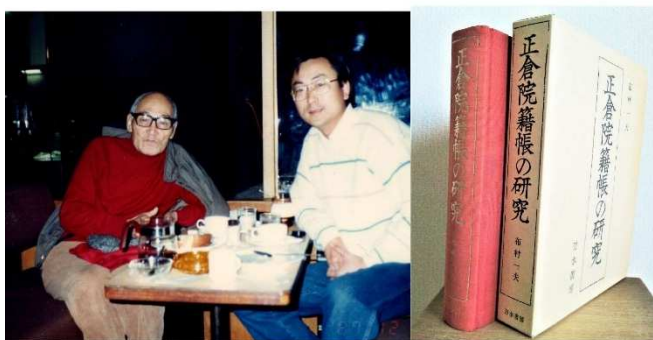
です。そこで一計を案じて、1987年より毎年、正月の10日前後に、先生あてで葉書におさまる程の挑発文を送ることにしたのです。最初は大井正『未開思惟と原始宗教』に書かれた文章に対し、37歳当時の私が文句をつけました。その一つとして私は、先生のきらいな社会学者の一人デュルケムを弁護したのです。そうしたら先生は、反批判の長文を、ワープロの練習だといって送ってよこされた。これに対し、私も負けずに反批判の批判をものして投函したものです。

先生は、公私様々な機会に、シュトラウスとかフョイエルバッハ、シュタインとか、ヘーゲル左派の主要な思想家を私に教授してくださいました。亡くなる間際のことです。喉も切開してあり、しゃべるときに手で塞ぎながら私に伝えられました。「石塚くん、満鉄時代に書いた原稿で、1冊出版してない本がある。それを託すから出してくれ」と、『東印度の農耕儀礼』というのですが、私はそのままの書名は止めて『フョークローアとエスノロジー

一』にしたんです。編集している間に先生は亡くなってしまったんです。それは先生の死後に出ました。印象深い、私には忘れぬ恩師です。

それから3人目。いま2時間ぐらいの話の中によく出てきた、バッハオーフェンとか、フレイザーとか、ド・ブロスとか、モーガンとか、こういう人物とその仕事を私に紹介してくれた布村一夫先生です。熊本女子大学の教授でしたが、すでに退職していました。何だか分かりませ

3. 布村一夫(1912-1993) ド=ブロス・バッハオーフェン・モーガン・フレイザー



んが、私のことをみっちり指導したく思われたんですね。「石塚くん、熊本から東京に行くから、いついつ新宿で会いませんか」とおっしゃるんです。それで、新宿東口の談話室滝沢という静かな喫茶店が定番の待ち合わせ場所となり、そこでレクチャーしてくれるんです。私が質問すると何でも答えてくださる。私が興味関心あることは何でも答える。2時間も喋ると、「石塚くん、中村屋に行こう」となる。すぐ近くに中村屋というレストランがある。そこに行って、「お昼ご飯食べなさい。何でも好きなの食べていいですよ」。「先生、ありがとうございます」。私が夢中になって食べるとすごく喜んで、また少しお話になる。ご本人は胃が弱って食べられない、スープくらいしか食べられないんです。「石塚くんが食べてるのを見てると、私はうれしいんだ」と言っていました。

この先生は最晩年に「年来の大事な原稿でまだ出してないのがある。それは正倉院籍帳に関する研究です。立正大学の高島正人先生も私の論文を読んでいるので、高島先生に相談したほうがいいかなとも思うけれども、石塚くん、これを本にしてくれないかな」とおっしゃる。それで、歴史学に関する本をいっぱい出している刀水書房の桑原社長さんのところに行って出版への道筋をたてました。ただし、刀水書房が編集に時間を取りすぎたため刊行が1年ちょっと延びたんです。その間に布村先生は亡くなりました。

これも私手がけたけれども、完成した時には先生は亡くなっていた。危篤のときに、私は連絡を受けて、羽田から熊本に飛行機で向かった。ちょうど、いまの天皇と皇后の結婚式の日で、熊本に行くから高天原を通るなと思って、宮崎県とかあのあたりで高千穂の峯上空を窓側の飛行機の窓から眺めてみましたよ。その日は昭和天皇の孫の結婚式だから

ね（笑）。けれど、上空に昭和天皇はいないし、神武天皇も誰もいない。「ああ、そうだ。神様姿は見えないもんな」と思いました（笑）。

4 人目は、立正大学院で私の指導教授になられた村瀬興雄先生です。先生はナチズムの研究者でした。私のことをすごく心配してくれて、すでに立正を退職してからですが、どこかに私のポストがないか一生懸命これを書いてくれたんです。推薦書。「右の者に対する指導教官として、所見を申し上げます」。最後に、「創価大学文学部特任教授、成蹊大学名誉教授、村瀬興雄」。推薦書は数回書いていただきましたが、全然恩返しできませんでした。でも、うれしかった。ほかに、先生は旧制高校の竹馬の友である大井正先生に私を預けました。村瀬先生はおっしゃいました。「私はナチズム研究者なので、君に十分な指導ができない。高校時代の親友で、明治大学でヘーゲル学派をやってる大井君がいる。彼を紹介するから3年間行って教えを受けなさい」と言われて、私は博士課程3年間、そこで原書講読とかを全部やったのです。大井先生は私を「盗聴生」と呼んで歓迎してくださいました。大井先生が亡くなるまで、ご自宅で酸素マスクをつけてまでやっていきました。シュトラウスの『イエスの生涯』を翻訳しました。

ドイツ現代史の連続説をとる村瀬興雄先生には、学問上の論敵が多くいました。ビスマルク時代の統一ドイツとエーベルト時代のワイマール・ドイツ、そしてヒトラー時代のナチス・ドイツが支配勢力および民衆生活のレベルで因果をもって連続しているとの見解は、とくに民主主義科学者協会をはじめとして平和と民主主義を標榜する戦後の諸学界では端から相手にされないことが多かったのです。ファシズムとそれ以外の体制を、だれしも、現象としては一括りにできない。その点は村瀬先生自身がよく語っていました。ただ、いくらナチスの残虐性と異常性、

例外性を強調しても、それだけではナチスはちっとも傷つかない、と先生は我々に語るのです。

次の写真をご覧ください。多摩の中央大学にセミナーハウスができた直後、1980年代の頃、諸大学連携の合同セミナーが開かれた際、最終日に撮影しました。いま福岡からここに来てく

4. 村瀬興雄(1913-2000) ナチズムと民衆生活 現代ドイツ史の連続説



れました瀧津伸さんも参加しています。この写真にはいませんが。

私は、その村瀬学説に心底学んだのです。「研究者には机と椅子とペンがあればいい」と言って、家族をかかえ経済的に困難な院生時代の私を慰めてくださった村瀬先生は実に温厚でしたが、ドイツ現代史学界——とくに若手研究者の間——にあっては相当な偏屈者で通っていたらしい。論争において自説を決して曲げないからです。けれども、曲げなくてけっこう。先生は、実証の甘いところはいつも素直に認め、他の研究者の業績に依拠する柔軟性を十分兼ね備えていました。

5 人目、上越市で石仏調査にかかわったとき、石仏虐待のことを書いている著者に会いたくなりました。一人だけ見つけました。上越の田舎では、昭和 33 年を最後に、地藏をぶん投げて虐待する風習があった、と書いた著者がいたんです。仏教美術史家の平野団三先生です。会いたくて、会いたくて、私から申し込んで、1991 年頃に会いに行ったら、平野先生はものすごく喜んでくださった。私が 41 歳の時で、先生は 86 歳だったから、年の差はダブルだったわけです。「石塚さん、よく来てくれた。私はこれから 2 年ばかりかけて、あなたを、上越で私が今まで調査した石造物を全部案内します。それからでないと私は死なないよ」と言われたんです。全部というのはいくらまで分かりませんが、この先生が望んでいる箇所はすべて私を案内してくれました。私は胸のポケットにカセットテープレコーダーを入れて、録音し続けました。ちょっとおしっこしたくなったりして草むらに行ったら、その音まで入ってます (笑)。次の写真をご覧ください。座って調査をしている時うしろに転びそうになるんです。ぱっと支えてあげたら、「私はもういつ死んでもいいなあ、石塚さんが上越の石仏についてもうほとんど調査してくれたから、私は安心だ」と言ったのです。「あっ、やばいな」と思って、2000 年に東京電機大学石塚ゼミのフィールド実習用参考書として、平野団三著・石塚正英編『頸城古仏の探究』という論文集を発行しました。私がワープロで打って綴じ、石塚研究室を発行所にして出したんです。それを平野先生にお贈りしたら、先生はもよりの役場数か所に持って行って寄贈し、その 3 日後に亡くなりました。

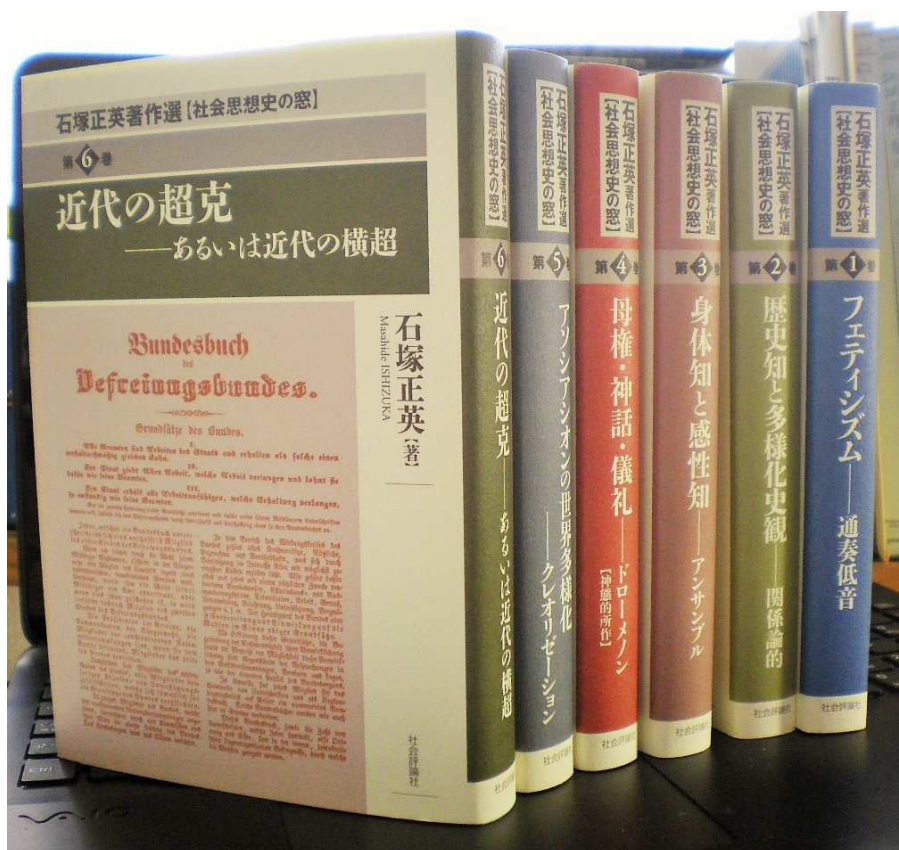
5. 平野団三(1905-2000) 野仏表象文化・頸城古道・フィールドワーク



以上です。この5人の先生がたは、私にとっては、いのちの研究者です。生活としての研究者です。きょうは、ここに私よりも若い人が多いから助言しますが、研究は自分自身の使命です。先生に何かねだってもダメです。先生に何かを求めるのではなくて、自分のやっていることを先生に見てもらおうというのが理想です。教育熱心な先生というのは、目を輝かせて近づいてきます。凄まじいです。酒井三郎先生はその典型です。幸運な縁ではありましたが、皆さん全員2000年までに他界されました。恩師の紹介はちょっと付け足しのようですけれども、まとめとして、私は少しやっておきたかったです。

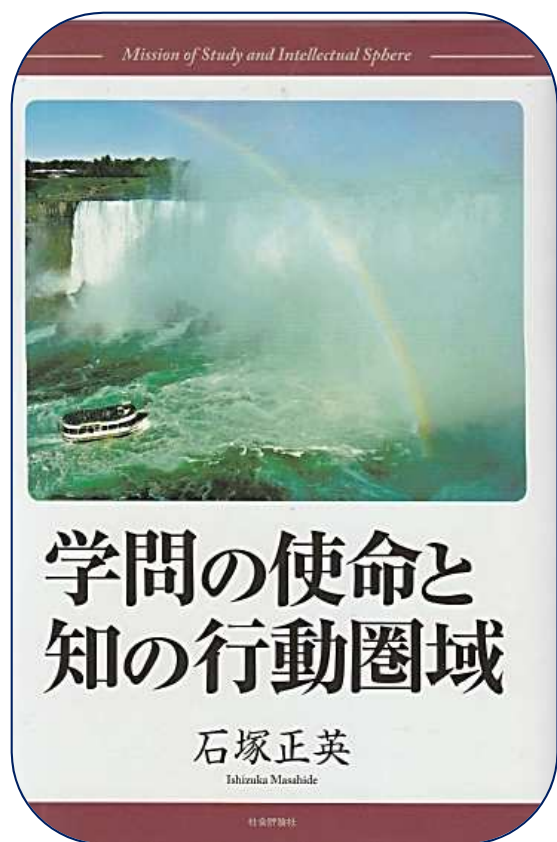
長々といろいろお話ししましたが、私の思いはかなえられました。これで講座を終了させて戴きます。ご清聴、ありがとうございました。(一礼)

*石塚正英研究生活50年記念誌編集委員会編『感性文化のフィールドワーク—石塚正英研究生活50年記念』社会評論社、2020年3月10日発行、所収



石塚正英先生 研究生活

50年記念講義



演 題

歴史知の知平、
あるいは転倒の社会哲学

石塚 正英氏

とき

12月1日（日）14時～18時

ところ

立正大学 品川キャンパス 3号館 311教室

【主催】歴史知研究会

❖感性文化のフィールドワーク

石塚正英 研究生活50年記念

感性文化の フィールドワーク

石塚 正英

—研究生活50年記念—



社会評論社